

2006 年度修士論文

1940 年代トルコにおける農村教員育成所の実像
ーその機関誌分析による考察ー

地域文化研究科 博士前期課程

アジア第3専攻

5202317 江原 翠

目次

序章	3
1. 農村教員育成所の概要	
2. 先行研究と問題の所在	
第1章 『農村教員育成所誌』の意義	9
1. 高等農村教員育成学校の概要	
2. 『農村教員育成所誌』の創刊	
3. 先行研究における『農村教員育成所誌』	
第2章 農村教員育成所誌―「農村研究調査」―	17
1. 第1巻1号 1945年1月	
2. 第1巻2号 1945年4月	
3. 第1巻3号 1945年7月	
4. 第1巻4号 1945年10月	
5. 第1巻1-4号の総括	
第3章 「農村研究調査」の分析―農村の姿―	27
1. 経済活動状況と生活	
(1) 農業と土地	
(2) その他	
2. 農村社会	
(1) 男女、子どもの役割	
1-1 男性(父親)の立場	
1-2 女性(母親)の立場	
1-3 子どもの立場	
(2) 人間関係	
3. 文化	
(1) 祝祭	
(2) 信仰、迷信、伝統	
第4章 結語	39
文献目録	

序章

1. 農村教員育成所の概要

トルコ共和国成立当初、総人口(13,648,270 人、1927 年人口調査)の 75.8%¹が農村部で生活をしていました。その農村部の識字率は 6%²であった。農村部の生活は、生計を立てる農業が雨水に頼る等不安定なものであった。この状況の改善を目的とし、農村を活性化させるために教員を育成しようとする考えは、農村教員育成所(Köy Enstitüleri 以下KEと略記する)の始まりの一つといえる。

KEの設立へ繋がる具体的な動きは、1936 年に始まる。当時国民教育相のサフェット・アルカン(Saffet Arkan)と初等教育局長を勤めていたイスマイル・ハック・トングチュ(İsmail hakkı Tonguç)が中心となって考案した、農村指導員コース(Eğitmen Kursu)と農村教員学校(Köy Öğretmen Okulu)である。農村指導員コースは、兵役中に下士官として活動した農村出身の青年を、除隊後 7-8 ヶ月間再度教育を行い、農村指導員として出身地へ送り込もうとするものである。この実験コースは成功し、1937 年第 3238 号農村指導員法(Köy Öğitmenleri Kanunu)が制定されることになった。コースが閉鎖される 1947 年までに合計 8675 名の「農村指導員」が育成され、農村部で新たに 7090 校の小学校が開校された³。農村指導員が比較的小さな村(人口 400 人以下の村)を対象にした運動であるのに対し、人口 400 人以上の村へ教員を送り込むために考案されたのが、農村教員学校(1940 年以後KEになる)である。1937 年に、イズミル(İzmir)のクズルチュッル(Kızılçullu)とエスキシェヒル(Eskişehir)のチフテレル(Çifteler)に 2 校が開校され、1938 年にクルクラレーリ(Kırklaleli)のケピルテペ(Kepirtepe)で、また 1939 年にカスタモヌ(Kastamonu)のギョルクヨイ(Görküy)で 1 校ずつ開校された。このようにして農村に適した教員を育成する教育政策が具体化し 1940 年のKEの法案の制定へ結び着いていく。

1940 年、第 3803 号農村教員育成所法がトルコ大国民議会で承認され、KEは公式に設立された。同法第 1 項で明記された通り、KEの開校の目的は、農村教員と農村地域で有用なその他の職業専門化家を育成することであった。上記のような過程を経て設立されたKEとはどんな機関だったのだろうか。以下でその概要に触れてみたいと思う。

トルコ全体で不足していた教員を育成するため、KEは各地に設立される必要があった。各KEは担当の学区を 3、4 県割り当てられ、トルコ全土に 21 箇所と、バランスよく開校された。(当時は全部で 64 県)。生徒は、教育後に必ず農村へ戻り、20 年間で教員として勤め上げることが義務付けられていた。この必

¹ Arayıcı, Ali. 1999. p.47.

² Ibid., p.171.

³ Tonguç, İ.H. 1998. p.528.

ず村へ戻るということを実現させるためには、農村と変わらぬ環境での生活を継続させる必要があった。そのため、校舎は、広い敷地を確保できる地域で、「市(Şehir)」からは距離をおき、「町(ilçe)」の中心地からはそれほど遠くない農村地域に建てられた。

KEの教育期間は5年間である。カリキュラムは、教養科目と実践を重視した農業科目、技術科目に分かれていて、授業時間の比率は2:1:1となっていた。教養科目では、トルコ語、歴史、数学、物理などの一般教養の他、絵画、体育と国民舞踊、音楽など芸術に関する授業も設けられていた。政府が農村地域を活性化するために必要としていた農業経済に直結する農業科目には、畑、畜産業、家禽業、漁業や水産業などが準備されていた。各KEがある地域の気候、風土や地理的特徴に従い、その地域に適したカリキュラムへ変更されていたようである。技術科目で、生徒は、鉄工業、大工業、建築業、手工業(女子生徒)に別れ、それぞれの専門性を高めた。これらの科目は実践を中心に進められ、例えば大工業や建築業の授業では、KEの校舎、寄宿舎などの建物および机本棚などの家具を作りながら技を習得していった。

4年生になると、生徒は教員コース(Eğitim Kolu)と保健員コース(Sağlık Kolu)に分かれた。教員コースを選択した生徒は、社会学と農村社会学、職業教育学と職業心理学、児童心理学と精神衛生学、教育史と職業教育史、教育方法と実践の分野を習得することになる。もちろんKEは実践を重視した教育方針を採用していたので、教育実習の実施も含まれていた。

保健員コースを選択したものは、同コースの授業が行われるハサンオーランKE、チフテレルKE、クズルチュッルKE、アリフィエKEのいずれかに移動した。女子生徒は助産婦となるため、男子生徒は保健員になるため、健康、健康、応急処置、疾病予防などの基礎概念を学んだ。このコースにもまた実習期間が設けられていた。

5年間の教育を終えた生徒は、出身農村あるいは周辺農村へ戻り、農村教員として20年間勤務することを義務付けられていた⁴。その際、初等教育を担当するだけでなく、農業技術の普及や成人の読み書きコースを開くなど、包括的な農村活性化に務めなければならなかった。

1937年に試行目的で2校の農村教員学校が開校されたが、1940年の第3803号KE法制定により合計14校に、1944年には合計20校(最後の1校は1948年に開校)と着実にその数を増やしていった。しかし、1946年の多党制移行後、野党民主党(DP)からの批判により、KEは新たな転機を迎える。サフェット・アルカンの後を継ぎ、KE設立に大きく貢献した国民教育相ハサン・アーリー・ユジェル(Hasan Ali Yücel)と、初等教育局長のトングチュが、その役を離職する。1947年には、上記で触れたカリキュラム内容が変

⁴ 卒業生の一部は、高等農村教員育成所(Yüksek Köy Enstitüsü)に進学した。農村教員育成所に関しては、本論文第2章にて触れる。

更される。1950 年、民主党が与党になると、KEは共学から男女別学制になる。さらに 1954 年、第 6234 号農村教員育成所と初等教育師範学校(İkögretim Okulu)の統合に関する法の制定により、「農村に適した教員を育成する」動きは終了してしまう。

2. 先行研究と問題の所在

本稿は、上記で触れたKEの組織的性質や政治的社会的背景を念頭に置きながら、KEで学ぶ農村教員候補生たちに焦点を絞ることで、従来にないKEの実像を提示してみたいと思う。

初等教育師範学校と統合され、KEが姿を消してから50年強が過ぎている。しかし、今日でも法律が制定された4月17日前後にKEの紹介記事が新聞(特にCumhuriyet紙)に掲載され、教育学者やKE出身者によるシンポジウムが開催されている。ここにKEの生きたテーマとしての魅力を見出せる。

設立へ向けた準備期間を含めてKEの歴史は、トルコ共和国の「改革」が推し進められ、国民へ共和国の新しいイデオロギーを定着させようとしていた時期と重なる。トルコ共和国の近代化または西洋化の歴史、または「アタテュルク改革」を語る上で、避けられない機関のひとつに位置している。その証拠として、西洋化あるいは近代化の流れを扱ったトルコ共和国通史の中で、KEの役割について言及する著書が多数存在する。例示すれば、新井政美氏は『トルコ近現代史ーイスラム国家から国民国家へー』において、KEをケマリストの改革を農村へ浸透させる役割を担った機関であり、共和人民党の文化組織である「人民の家(Halk Evleri)」や「人民の部屋(Halk odaları)」と並行させて紹介している⁵。Zürcher氏(Erik Jan Zürcher)もまた、その著書の中で、改革を届け、近代技術を広げ、そして世俗的で実証的な発想を植えつける企ての一つとしてKEを挙げている⁶。

通史では以上のように扱われているが、次にKEを主題として扱った研究はKEをどのように分析しているのだろうか。次に見ていきたい。

KE研究でもっとも有名なのは、カービー氏(Fay Kirby)の『トルコの農村教員育成所』⁷である。1960年にコロンビア大学教育学部学位論文として受理された論文は元々英語で書かれたものであるが、トングチュの息子エルギン(Ergin Tonguç)によりトルコ語へ翻訳され、トルコ人によるKE研究で頻繁に引用されている。トルコ語翻訳の際し、若干の変更が加えられているようであるが、骨組みは原型のままであるという⁸。女史は1947-50年にトルコ共和国で教師を務め、1951-54年に再びトルコに滞在し、KEの調査を行った。カービーの調査期間は、KEの運営されていた時期(様々な変更が加えられ、原型をとどめていない

⁵ 新井政美、2001 208 頁、218 頁。

⁶ Zürcher: 1995. p.202.

⁷ 以下、書および論文の原語題は文献目録を参照されたい。

⁸ Kirby, Fay. 1962. p.V.

時期といえるが)と重なり、本人もまた村々を視察していたことから、フィールドワーク的な要素があると言えるだろう。彼女は、全体を通して、KEをケマリストイデオロギーに満ちた機関と解釈している。また「どの農村にも学校と、教員を」という小さな目標のためではなく、近代国家を創るという大きな目標を実現する道であったとしてその功績を高く評価している⁹。

また、『ケマリスト期トルコにおける教育政策と農村教員育成所』の著者であるアラユジュ氏(Ali Arayıcı)は、題名にあるように、ケマリスト期に農村部で行われた教育政策の研究を、学術的な注目が低かったと考える KE に重点を置きながら行っている。研究には統計データが多用され、実態を把握しやすい研究であると評価できる。しかし、KEに社会経済的あるいは教育学的にアプローチするなど、あまりにも多面から KE を分析しようとするため、それぞれの主張が弱くなっている印象があることを指摘したい。アラユジュ氏は、「はじめに」の部分で、KEも含めケマリスト期の教育政策を同化政策つまり「トルコ人化政策」であった¹⁰と力強く述べる一方、本文の最後でKEを民主主義的で、政教分離(Laik)な教育機関だったと結論¹¹づけている。また、章立てと内容にズレが見受けられる箇所があるため、構成に注意を払いながら読み進めないと何を言いたいのか見落としてしまう恐れがある。

その政治的役割の結果について言及したのは、ヒュリエット・コンヤルである。コンヤル氏は雑誌『歴史と社会』に発表した論文で、KEを二つの視点から理解しようと努めている。第一に上から下への政治経済的政策としてのKE、第二にトルコ社会の近代化の基盤を構築する教育的役割としてのKEである。当時は新しい共和国にケマリストの原則を定着させる必要があり、1929年の世界恐慌から立ち直るため、国家統制主義の経済政策で、農民を保護することを第一の主眼としていた。コンヤル氏は上記のような状況から、KEの教員および教員候補生が一党支配時代の共和人民党(CHP)の政治的プロパガンダの役割を任されていたと書いている¹²。政治的な役割の強さを主張していたコンヤル氏ではあるが、当時、農民は政府からの各種税金に苦しめられていたため、政治に共感することはなかったと結論付けている¹³。それ以上に、KE出身の教員達は、農村経済の活性化に貢献したとコンヤル氏は述べるものの、残念ながらその根拠となる資料が提示されていない。彼はKE出身者から直接の聞き取りを行っているため、そこから得た情報から判断しているのかもしれない¹⁴。

以上のようにコンヤル氏は政治と教育の2つの角度からKEを理解しようと勤めた。他方、教育と政治と

⁹ *Ibid.*, p.416.

¹⁰ Arayıcı, Ali. 1999. p.20.

¹¹ *Ibid.*, p.347.

¹² Konyar, Hüriyet. 1996. p.13.

¹³ *Ibid.*, p.17, 18.

¹⁴ 結語の中で、KE出身者を次のように描写している。パイオニア的な役割を担う、人助けを厭わない人物であり、また自らを農民と認識しない、秩序だった生活の続けながら、生涯に渡って何かを生産しようとする性格を持ち続けている。(*Ibid.*, p.18.)

いう視点は同じだが、互いの影響関係においてKEを見つめようとしたカプラン氏は『トルコの国民教育のイデオロギーとその政治的集団化過程への影響』において、KEの管理規則(Yönetmeliği)や卒業生のコメント、KEの校歌ら(Ziraat Marşı 及び Köy Enstitüleri Marşı)にみられる極端なアタテュルクおよびケマリズムの称賛から、その国家主義(Milliyetçilik)の強さを導き出している。

さらに、教育と経済あるいは社会との関係を見つめようとしたバシュギョズ氏(İlhan Başgöz)は、『トルコ教育の行き詰まりとアタテュルク』の中で次のように分析する。教育を通じて経済的、社会的発展に貢献しようという目的でKEは設立されたが、結局は教育という手段で経済を発展させることの難しさを証明してしまう結果になった、とKE効果を若干消極的に評価している。一方で、当時のトルコの状況において民衆から、予算を費やさずに、希望み満ちた健全な人材を育成にしたことが、発展途上国が参考にできる教育モデルを提示しているとして、価値を見出している¹⁵。

他の研究とは一線を画し、異なる視点からKEを評価したのは、ウィンター氏(Mihael Winter)で、その著書『ケマリストトルコにおける教育の近代化』で、KEの設立、運営の結果得られたトルコの識字率および就学率の変化を中東地域のそれと比較することで、KE効果の高さを評価している。対外的な比較によるKE評価は他に見られないので、面白い視点として明記しておきたい。

ここで、内側から見たKEの紹介本について触れたい。その中でも 1944 年にアクスKE(Aksu Köy Enstitüsü、アンタルヤ)を、1947 年に高等農村教員育成所¹⁶を卒業したテュルクオール(Pakize Türkoğlu)氏の『トングチュと育成所』は、KE出身者による出版物の中で一番の大作といえる。

『トングチュと育成所』の構成や章立ては他の著書とさほど差異は見られない。しかし、テュルクオール氏が KE および YKE 出身ということもあり、KEの様子を解説する際、具体例が挙げられる、生徒の行動の傾向について彼女の見解が述べられるなど、内部の人間であったが故に知りうる事実が書き込まれている点は特筆に値する。ただし、時折、思い出を美化するような表現、誇示の表現があり客観性に欠けるので、そのまま読み進める際には注意が必要であろう。テュルクオールの作品は、資料に基づいた学術的な要素を持つ一方で、本人の経験や見聞による事実を膨大に含んだ回顧録的な要素を併せ持っているのである。単純なミスと思われるが、一部のデータ¹⁷に誤りがあることも指摘しておこう。

これまで、KE に関する先行研究と、KE に言及する学術論文の概要を紹介してきた。これらの研究から、KEは政治、経済、社会、文化的側面においてその役割を期待され、また実際に影響を与えた機関であるということが言える。長い間論議が交わされ、多くの研究書において言及されている理由がここにある

¹⁵ Başgöz, İlhanç. 2005. pp.260-262.

¹⁶ KEの高等部と言える機関。詳細は第2章を参照されたい。

¹⁷ Türkoğlu, Pakize. 2000. p.119.

と思われる。ここで、先行研究の傾向について述べたいが、特に「アタテュルクの革命を農村まで届ける」という政治的な役割を持つ機関としてのKE像が強調されているといえる。無論、当時のトルコの政治的、経済的背景およびKE設立の歴史を考慮すれば、KEが持っていた前述の要素は否定されるものではない。通史を扱う新井氏、Zürcher氏を始め、KEをメインテーマとしたカービー氏、アラユジュ氏など、学術的な論文はいずれも政治的な視点からのアプローチが強い。しかし、時代の政治経済的背景やKEの設立背景から考察した分析だけで、KEの分析は十分といえるだろうか。今でもテーマとして扱われるもう一つ別の理由があるように思える。

本稿では全てを紹介することは不可能だが、KEに関する書籍は予想以上に多い。アラユジュ氏が指摘している¹⁸ことでもあるが、KEに関連する出版物はその数が多いものの、学術的と評価できるものは一部に限定される。なぜなら、KE出身のテュルクオール氏が『トングチュと育成所』を記したように、出版物の大半がKE関係者(創設に携った人々の家族、KEの卒業生、KEの教員など)によって書かれたものだからである。これらの書籍は、大半は記述が客観性に欠け、回顧録と分類するのが妥当である。

それ以外に学術論文、回顧録の両方において、偏った傾向があることが指摘できる。総合的に学術論文も回顧録的出版物で扱われる内容は、多少の違いはあるにしても、クロニクルにKEを描写し、「創設者トングチュ」、「国民教育相ユジェル」、「KE設立へ向けて」、「KEの基礎的思想」、「KEのカリキュラム」、「KEの運営」、「KEの崩壊」と類似した視点からKEを分析している。よって我々は今後、KEを従来とは別の観点から角度から研究、分析する必要があり、本稿はその課題に挑戦しなければならないと考える。

それでは、我々はKEをどの視点から分析するべきだろうか。ここで筆者は、これまでの研究における視点の欠如について言及したい。前述した先行研究では、KEの骨組みについての分析が十分に行われてきたことがわかっている。ところが、そこで生活し、育成されていた農村教員候補生たちに焦点を当てた研究がほとんど見当たらないのである。もちろん、入学する生徒の条件や、学級内容に関する内容は、歴史的資料に参照しながら説明されている。しかし、それらはあくまでも概念化された生徒でしかなく、KEで育成された農村教員候補生としての生徒の実態からはかけ離れる。

筆者は、教育を受けた側の生徒がどのように成長したのかを分析することで、KEの本質あるいは、潜在的可能性を見出せるのではないかと考える。そこで、本稿では、以上のような諸先達の研究や回顧録を参考にしながら、これまで研究の対象とされてこなかった「生徒(つまりは農村教員の候補生)」の視座を切り口としてKEの実像に迫ってみたいと思う。では、どのような手段で農村教員候補生たちを分析していったらよいのだろうか。前述の回顧録的な出版物を読み解く方法もあるが、無論、その膨大な数の回顧録や文献の全てを、筆者一人が読みきることは物理的に不可能である。また、「トングチュは、KEは素晴

¹⁸ Arayıcı, Ali. 1999.p.19.

らしかった」、「KEが続いていれば・・・」と賞賛風の語調から客観的な分析を実現することは、困難を極められると思われる。

先行研究や回顧録を吟味していく中で、本稿にとって重要資料となりうると筆者が判断したのは、「農村教員育成所の頭脳であり心臓である¹⁹」と称される高等農村教員育成所(Yüksek Köy Enstitüleri)²⁰の発行した機関誌、『農村教員育成所誌(Köy Enstitüleri Dergisi)』である。本稿では同機関誌の作品を分析し、農村教員候補生たちの視座や関心、心情を明らかにすることからKEの実質的な側面を提示したい。

第1章 『農村教員育成所誌』の意義

これまで、KEの概要及び先行研究やKEに関連した出版物の特徴について見てきた。この章では、本稿で分析対象とする前述の『農村教員育成所誌』を紹介していきたい。

1. 高等農村教員育成学校の概要

「ハサンオーラン農村教員育成所から、1年に4号刊行される」

『農村教員育成所誌』の裏表紙にはこう書かれている。また、雑誌編集部(Dergi kolu)の住所は「ハサンオーラン農村教員育成所、雑誌編集部 アンカラ郵便局私書箱53号 (Hasanoğlu Köy Enstitüsü Dergi kolu Posta Kutusu 53 ANKARA)」と明記されている。しかし、先行研究では、『農村教員育成所誌』の刊行元は高等農村教員育成所(Yöksek Köy Enstitüsü、以下YKEと標記)とある。まずはこの矛盾を解き明かすため、YKEを知る必要がありそうだ。

YKEの歴史は、KEで勤務することを前提とした教員養成コースを、ハサンオーランKEの中で開講するとした、1942年10月19日の教育委員会(Talim ve Terbiye Heyeti)の決定に始まる。同年11月から開始されたコースは6ヶ月と短く、チフテレルKEとクズルチュッルKEの最初の卒業生から希望する者が参加した。YKE用の校舎はまだなく、専任の教師もいないため、生徒たちはアンカラにある高等教育機関まで通学していたようである²¹。

翌年7月24日、同委員会が高等農村教員育成所規範(Yüksek Köy Enstitüsü Taimatnamesi)を定めたことにより、具体的な目的や授業内容などが明文化された。同規範第2条で、YKEの目的を次のように示している。

A-第2条-高等農村教員育成学校の設立目的は以下の通りである；

¹⁹ Tonguç, İ. H. 1998, p.542.

²⁰ アンカラ県のハサンオーラン(Hasanoğlu)農村教員育成所に併設。

²¹ Kirby, Fay.2000. p.260. Türkoğlu, Pakize. 2000. p.422. Özkucur, Abdullah. 1990. p.54.

A-1) 本規範に明記されたKEに勤める男女の教員を育成すること。

2) KE卒業生の勤務する農村部へ赴く、巡回教員、巡回主任教員、地方初等教育視学官を育成すること。

3) 必要なコースに通わせることで、KEに勤務する教員を育成すること。

B-農村調査の中心的役割を担うため、農村部の学校や育成所の関連分野について必要な研究を行い、これ等を関係者が活用できるよう出版すること。

C-高等農村教員育成所の教員が使用する教科書を2年以内に執筆すること。

このようにKE教員専用のコースが必要となった背景には、次のような状況があったとある。KEは、そのカリキュラム故に、多彩な教員を必要としていた。第3803号法の第17条によると、次の教育機関の卒業生を採用することが可能であった。

- 1) 高等教育機関及び大学
- 2) ガーギー教育学校
- 3) 教員学校
- 4) 商業高校及び中等農業学校
- 5) 男子職業学校及び女子職業学校
- 6) 農村教員育成所
- 7) 建築専門学校
- 8) その他、著名な技術学校及び職業学校

しかし、KEの組織や法律 KE の設立目的、法的で定められた特殊な義務があるため、別途KEのための教員を養成する必要性に直面した。また、KEに勤務する教員の質を向上させる必要もあった。更に、農村教員が農村で担う役割は、普通の教員とは異なり農村と包括的に向き合うことであり、農村教育を幅広く実現することであった。これらは法律、研究、調査に依拠していなければならず、その過程を実現するために、YKEが必要になったのである²²。

それでは、具体的にどんな授業が行われていたのだろうか。高等農村教員育成所規範E-第16項によると、YKEには次の8コースが準備されていた。生徒は、入学後それぞれのコースで専門性を磨くことになる。

- 1) 芸術コース(男子生徒、女子生徒)
- 2) 建築コース(男子生徒)
- 3) 金属加工コース(男子生徒)

²² Köy Enstitüleri I - II 2003. p.133.

- 4) 畜産コース(男子生徒)
- 5) 家禽コース(女子生徒)
- 6) 農業【畑、菜園】コース(男子生徒)
- 7) 農業経済コース(男子生徒、女子生徒)
- 8) 家庭科および手芸コース(女子生徒)

技術だけでなく、全コースに共通の教養コースも設けられていた。それらは、高等農村教員育成所規範 E-第 17 項に明記されている。同項によると、次のような授業があった。

- 1) 革命史およびトルコ共和国体制
- 2) 教職; a) 社会学、b) 職業教育学、c) 児童心理学及び職業心理学、d) 教育法及び実習、e) 教育史及び職業教育史
- 3) トルコ語;a) 正書法、b) 読解
- 4) 外国語(英語、フランス語、ドイツ語)
- 5) 軍事知識

YKEでの教育期間は最低3年であり、1年度には2学期(1学期4ヶ月)設けられ、年度末に2ヶ月の実習が行われ、実習が終了すると2ヶ月の休暇が与えられた。(同規範 B-第3条) YKEの入学者は、まずKEの教員によってKEを卒業する生徒あるいは、農村で教員として勤務する卒業生から選ばれていた。YKEの生徒の候補になった生徒と農村教員は、まずトルコ語の選抜試験を受け、試験を通過した者は希望するコースの実践試験を受験したのである。(同規範 C-第4-8条)

しかし、1943年の段階では、まだ選抜試験は行われていなかった。前述の2校に加え、ケピルテペKEから入学者が集められた。翌年、ようやく1940年に開校された18校のKEから卒業生が輩出され始めたため、規範に沿った試験が行われるようになった。この入学選抜に関し、テュルクオール氏は、各KEにその生徒数に応じた「YKE入学の割当て人数」が設けられていて、東西南北全てのKEから生徒が集められたと述べている²³。YKE入学者一覧表を見ると、少ないKEで2名、多いKEで11名、合計90名が入学している²⁴。

見てきた通り、YKEは、トルコ各地に設立されたKEで学んだ生徒が集められ、KE専属の教員や農村地域へ赴く巡回教員を育成する意図で設立されていた。トングチュが「農村教員育成所の頭脳であり心臓²⁵」と表現したこの組織の重要性を理解できる。また、規範第2条B項を見ると、『農村教員育成所誌』の刊行は、YKEが中心となって行っていたことがわかる。

²³ Türkoğlu, Pakize. 2000. p. 424.

²⁴ Köy Enstitüleri Dergisi. Sayı 1. pp.176-177.

²⁵ Tonguç, İ. H. 1998, p.542.

1944-45 年度に 18 校の KE 出身の生徒を迎え、1945 年 11 月に初の卒業生を送り出した YKE はその本格的な教育活動を稼働させ始めた。1946 年の多党制移行後、KE は様々な変化を強いられたことに関しては前章で言及したが、YKE も同様の流れをたどり、最初の卒業生を送り出してから 2 年後の 1947 年 11 月に閉鎖され、生徒たちは別の教育機関へ転校させられた。

2. 『農村教員育成所誌』の創刊

前節では、KE の高等部である YKE について見てきた。YKE の開校期間は 1942-47 年の 5 年間だけ。生徒が全学年揃い、校舎の準備や専門家の教員による授業が行われるようになったのが、1944-45 年度からであることを考慮すると、実質的な稼働期間は更に短くなる。本節では、この短い期間に YKE が関わった『農村教員育成所誌』の創刊と方向性を探っていきたい。

『農村教員育成所誌』は、YKE にて西洋文学の教員として勤めていたサバハッティン・エユブオール (Sabahattin Eyuboğlu)²⁶ の指導の下、1 年に一度生徒が選出する正規編集委員を務める 5 名の生徒と予備編集委員を務める 2 名の生徒で構成される編集部 (Dergi Kolu) によって刊行された²⁷。編集委員を務めた生徒の情報はなく、自らが編集委員を務めていたアブドゥッラフ・オズクジュール (Abdullah Özkur) によって、アリー・デュンドル (Ali Dündar) もまた編集委員を務めていたことがわかるぐらいである²⁸。同様に、残念ながら創刊や編集の基準、廃刊に至るまでの経緯について書かれた決定的な資料は残っていないと思われる。しかし、前述された回顧録的出版物の中に、『農村教員育成所誌』について書かれた箇所見られるので、この雑誌と平行してこれらを飼料として『農村教員育成所誌』の全体を把握してみたい。

『農村教員育成所誌』を創刊するに当たり、編集委員になった生徒に対し、エユブオールが提示した『農村教員育成所誌』案によると次の 2 つが主要目的といえる。

- 1) YKE の生徒が、トルコの各地で行っている視察、調査、研究、実践、観察、実験やそれらの行為から獲得している新しい知識を自分たちそして他の KE に役立てられる形でまとめること。
- 2) トルコ各地にある民話、物語、民謡、小話などの伝承文学を雑誌にまとめること。この作業に、トルコ全 7 地方の全てを網羅した 21 (20) 校²⁹の KE を活用し、YKE 内に伝承文学の保存所を設立すること。

そして、エユブオールはこの雑誌により、全ての KE が互いに連帯感を育み、同時に生徒が思想を洗

²⁶ サバハッティン・エユブオール (1908-1973) : 1942-46 年、YKE の西洋文学担当教員として勤務。

²⁷ Türkoğlu, Pakize. 2000. p. 445.

²⁸ Özkur, Abdullah. 1990. p. 390.

²⁹ 当時はまだ 20 校しか開校されていなかった。しかし、資料として参照した Özkur, Abdullah. 1990. p. 243. には 21 校と明記されている。

練させ、生産や創造、分配の精神を獲得することができると考えていたようである³⁰。前述した主要な目的の一つ目は、YKE規範、第2条B項に示された「農村調査の中心的役割を担うため、農村部の学校や育成所と関係のある分野について、必要な研究を行い、これ等を関係者が利用できるよう出版すること」という、設立当時にYKEが期待されていた役割の実現であったと言える。

次に、中表紙にある「1年に4号刊行される」とは、具体的にいつだったのか、具体的な刊行年月を見よう。

第1巻1号	1945年1月
第1巻2号	1945年4月
第1巻3号	1945年7月 ³¹
第1巻4号	1945年10月 ³²
第1巻5/6号	1946年2-7月
第1巻7/8号	1947年8/9月

『農村教員育成所誌』は第1巻1号から8号まで発行されている。1945年は3ヶ月毎に定期的に刊行されていることがわかる。ところが、裏表紙の「ハサンオーラン農村教員育成所から、1年に4号刊行される」という一文³³にも関わらず、1946、47年はそれぞれ5/6号と7/8号が1回のみ刊行されている。定期刊行は、1945年の1年間、1-4号でしか実現されていないことがわかる。

5/6号は2-7月と6ヶ月分の刊行となっていて合併号の観を呈している。実際に刊行された雑誌の頁数を吟味してみよう。後述表1を参照すると、1945年刊行1-4号の平均145.3頁と比較し、1946年刊行5/6号は約1.3倍の185頁と若干の増加が見られる。合併号と称するには頁の増加が少なくないだろうか。他方7/8号は、8/9月と表記されているので、恐らくこの2ヶ月に送付された作品を編集したのではないかと考えられる。頁数はというと、1945年の平均と比べ、7/8号は約0.5倍と約半分まで激減しているのがわかる。(P.15掲載の表1参照)

定期刊行が不可能だった理由、あるいは頁数が激減した背景を我々はどう解釈することができるだろうか。掲載できる作品が不足していたのだろうか。1946年は変化の始まる年であることは前述したが、その

³⁰ *Ibid.*, p.243.

³¹ 雑誌のオリジナルでは1946と明記されている。

³² 脚注31と同様。

³³ 筆者の手元にある一次資料は、5/6号の表紙及び裏表紙が欠けているため、5/6号に関しては断定できないが、7/8号の裏表紙に明記されていることから、5/6号にも同様に書かれていたと推測できる。

影響で編集が遅れたことが考えられる。1946 年国民教育相ユージェルが離任した後、ハサンオーランKEの訪問者数が増加した、と当時の様子をデュンダルは語っている。デュンダルは訪問者が生徒たちによく読む書籍、雑誌、新聞、頻繁に出入りする場所、アンカラへ出向いた際に会う人物、会話の内容、好きな作家、詩人、画家等について質問をしていったと続ける。デュンダルは、自分が図書室にいて³⁴、尚且つ雑誌の編集を担当していることから質問攻めにあったと話している³⁵。これらのことから、訪問者への対応や圧力のため、編集作業が円滑に進められる状況になかったと推測することが可能である。

作品や編集について若干触れたが、『農村教員育成所誌』に掲載される作品は、各KEあるいはYKEに在籍する生徒によって制作されたものである。先行研究では、エユブオールを中心に、編集部が応募作品を審査していた³⁶とある。ところが、『農村教員育成所誌』第1巻2号によると、1号刊行に際し、作品審査会が設けられ、YKEに在籍する1年生がそれに参加したことがわかる。彼らは、作品審査で、文法や言語の平明さ、事実との符合性、結論の導き出し、遠回しな表現が回避された主張の明確性や読み易さ、自分たちの生活との関連性などの観点から評価していたのである。参加生徒による作品への投票を行い、作品の優劣を決めていたようである。残念なことに、評価基準は詳細まで決められていたものなのか、また、ここで述べられている評価基準が全8号を通じて一貫していたものなのかは不明である。しかし、応募者である生徒に対し審査の様子を伝えたということは、少なくとも上記の基準は重視されていたと考えても矛盾はしない。

それではどんな作品が掲載されていたのか、雑誌の中身について見ていきたいと思う。『農村教員育成所誌』は大きく分けて、次の3つの部門からなる。

- 1) 農村研究調査(Köy İncelemeleri)
- 2) 育成所自由作品(Enstitü Çalışmaları)
- 3) 時事通信(Haberler)

農村研究調査には、その名の通り農村の調査または、各自の研究の報告が掲載されている。YKEの生徒は授業で学習する専門分野に関し、課題を出されていた。その調査結果をこの雑誌で発表していたのである。育成所自由作品は、前述の農村研究調査と同類の研究調査、文学作品(詩、物語、劇、伝承文学)、翻訳、各KEの活動紹介、書籍紹介、要約と批評のほか、随筆と分類できるものが掲載され、研究

³⁴ 彼らの編集室(Dergi odası)は、YKE校舎の地下にある大きな図書室に設置されていたようである。
(Türkoğlu, Pakize. 2000. p.423.)

³⁵ Özkucur, Abdullah. 1990.p.389,390.

³⁶ *Ibid.*,p.389, 390、Başaran, Mehmet 1999. p.58

より文芸作品の要素が強い³⁷。時事通信の欄は、各KEからの活動の様子が報告されている。事件のような出来事ではなく、生徒たちが行う農作物の生産状況、技術の実践状況、研修旅行、開催された講演会の概要が書かれている。

表1 『農村教員育成所誌』第1巻1-8号頁数一覧表

	1号	2号	3号	4号	5/6号	7/8号	1-8号合計
農村研究調査	65	50	48	62	45	28	298
育成所自由作品	61	94	52	78	127	41	453
時事通信	30	6	9	10	9	5	69
その他	11	5	-	-	4	-	20
合計	167	155	109	150	185	74	840

その他: イスマット・イノニュ大統領またはハサン・アーリー・ユージェル国民教育相の言葉

『農村教員育成所誌』第1巻全8号に掲載された作品の部門別頁数をまとめたものが表1である。この雑誌が農村研究調査、育成所自由作品、時事通信と部門別に編集され、最初の頁に部門名が明記されているので、それに従い単純に頁数を計算した。但し、7/8号は5/6号までの編集方法とは異なり、農村研究調査と育成所自由作品が順不同に掲載されているため、他号の傾向を参考にした上で筆者独自の判断によって分類した。

表1から前述の3部門の頁数がわかるが、1号以外の全号において、農村研究調査より育成所自由作品の方が多くなっている。1号から8号までの合計で見ると、53.9%と半分以上を育成所自由作品が占めている。後述するが、先行研究はこの育成所自由作品部門から引用することが多く、それ故この雑誌はどちらかというと、文学的側面が強調されることが多かったと指摘することができる。だが、農村研究調査も全体の35.4%を占め、決して少ないとはいえない。表2は、各号における2部門の作品数を表したものであるが、表1、2から1作品に割かれる頁数を算出すると、農村研究調査は5.3頁、育成所自由作品は2.5頁となり、前者の方が多ことがわかる。つまり、研究調査報告の作品は育成所自由作品と比較して重量のある作品である可能性がある。文学的作品集と決定付ける前に、『農村教員育成所誌』を改めて分析する必要があるのではないだろうか。

³⁷ 『農村教員育成所誌』には明確な区分は一部の作品を除き表示されていないため、筆者が独自の判断で分類した。

表2 『農村教員育成所誌』第1巻1-8号作品数一覧表

	1号	2号	3号	4号	5/6号	7/8号	1-8号合計
農村研究調査	12	13	4	8	12	7	56
育成所自由作品	30	35	21	31	48	14	179
合計	42	48	25	39	60	21	235

さて、ここまで『農村教員育成所誌』の創刊と方向性について理解を深めてきたが、このような雑誌を選考研究がどのように扱ってきたのか、一部言及したのかについて、再度まとめてみたい。

3. 先行研究における『農村教員育成所誌』

不思議なことに、『農村教員育成所誌』を主要テーマとして分析した学術研究は、皆無と言える。もちろん、研究の途中でこの雑誌に言及するものや、回顧録的出版物の中で、雑誌の概略、生徒の文芸作品を掲載し紹介するものは見られる³⁸。例示するならば、既述したカービー氏は、その研究で、『農村教員育成所誌』に掲載されたKE活動報告に関する作品を、事実の根拠を示す資料として参照している。また、氏は『農村教員育成所誌』を、現実と向き合って書かれた科学的作品集であったと指摘している。そしてこの動きによりYKEは歴史及び農業経済の分野で、ケマリストと対抗する「農村主義者(Köycüler)」、「トルコ主義者(Türkçüler)」、「アナトリア主義者(Anadolucular)」、「トゥラン主義者(Turancılar)」の思想反動が起きるはずであった³⁹と述べているつまり、ケマリストらが否定した共産主義や極右ナショナリズムの温床となる可能性を示唆しているのである。しかし、作品の概要に触れるのみで具体的な作品の中身への言及がなく説得性にかける。更に全8号刊行されているこの雑誌をカービー氏は全5号⁴⁰と誤認している点から、『農村教員育成所誌』を軽視している様子が伺える。

テュルクオール氏は、『農村教員育成所誌』の概要を紹介する他、授業や活動を説明する際、育成所自由作品から詩を引用することによって、推測される生徒の心情により具体性を持たせている。引用の数は多いが、カービー氏同様、あくまでも主要な資料ではなく補完的資料の位置づけと言える。

KE出身者がトルコ文学史において「農村文学」という新たな分野を築いたといわれるが、その観点から『農村教員育成所誌』を取り上げたのは、バイラク氏(Mehmet Bayrak)である。氏は、『農村教員育成所と農村文学』の中で、KEが芸術や文化において発揮した実力の証拠品としてこの雑誌を提示し、「雑誌を理解すること＝KEを理解すること」と分析に意欲を見せてはいる⁴¹が、詩8作を紹介しただけで、期待

³⁸ Makal, Mahmut. 1997. Halise Apaydın. 1997. Başaran, Mehmet. 2001.

³⁹ Kirby, Fay. 2000. p. 262-265.

⁴⁰ Ibid., p.262.

⁴¹ Bayrak, Mehmet. 2000. p.79-85.

はずれである。

なぜ、『農村教員育成所誌』は、これまで研究対象にならなかったのだろうか。我々はここまで先行研究や雑誌の概要を追ってきたが、その過程からこの雑誌にはトルコ全土に散在したKEの価値観が凝縮されていることが理解できる。KE 生徒の作品が集められ、KE (YKE) 生徒により評価編集され、KE 生徒によって読まれる⁴²『農村教員育成所誌』は、「KE生徒のKE (YKE) の生徒によるKEの生徒のための雑誌」と定義付けすることができる。筆者は、KEを新たな視点から研究する試みにおいて重要な資料となりうることを確信した。よって、この雑誌を分析することで、生徒は何を見ていたのか、あるいは、何を問題としていたのかなどの具体的な視座や関心が読み取れるのではないだろうか。また、本稿は、これまでは補助的資料としてしか扱われなかったこの雑誌に重点を置き、新たな視点から分析されたKE像を提示するという意味において、大きな意味を持つといえる。

本稿での分析では、『農村教員育成所誌』の中から、1945 年刊行第 1 巻 1-4 号の農村研究調査のみを対象としたい。1-4 号の育成所自由作品および第 1 巻 5-8 号の詳細については、前節で言及した程度で留めることとする。その理由は、農村研究調査は先行研究において作品名や作者の氏名などは提示されるも、その内容に関する深い考察がなされてこなかったため、この部門を集中して分析する必要があるからである。また、先行研究や、回顧録の中でも指摘されている通り、「1946 年」はKEにとって変化の年であった。その政治的背景を考慮すると、意図的な変更がなされている可能性を持った第 1 巻 5-8 号(1946、47 年刊行)ではなく、KE史の中でも絶頂期と言える 1945 年刊行の雑誌の方が、より純粋なKEの像を導き出せると筆者は判断する。YKE閉校の 2 ヶ月前に刊行された最終号第 1 巻 7/8 号は、その構成からどうか刊行に漕ぎ着けた観を呈しているのである。また、直接的に生徒たちの考えや視点を反映していない時事通信(Haberler)も同様に分析対象としないこととする。

それでは、果たして研究に値しない雑誌だったのかどうか、第 2 章はまず作品の概要について見ていこう。

第 2 章 『農村教員育成所誌』-「農村研究調査」-

『農村教員育成所誌』の農村研究調査では、授業の研究課題や論文が掲載されてあるが、1945 年刊行の雑誌では合計 37 つの調査研究のうち、2 号に掲載された 4 つのKE生徒作品以外はYKE生徒のものである。以下、研究調査の題名、研究者の氏名(所属)、分野、頁数と調査の内容をまとめた。なお、筆者

⁴² 刊行冊数については、正確な数字が見当たらない。参考までに先行研究に明記されている数字を紹介すると、16,500 部(Başaran, Mehmet. 2001)、17,000 部(Başaran, Mehmet 1999)、20,000 部(Mehmet, Cimi. 1995)とある。1944-45 年のKE生徒数は 15,561 人、教員数は 505 人(Gedikoglu, Şevket. 1971. p.71)であることから、16,000 冊強の部数を刊行していたと推定できる。

の判断で、「社会」、「農業・植物」、「歴史」、「芸術」、「保健」、「その他」の 6 分野に分類している。「社会」には、日常生活の実態を描写したものと、結婚式、祭など非日常を記したものがあるので「社会」の中で更に「社会【生活】」と「社会【非日常】」に分類した。村の農業の実態の研究調査があるが、これらは生活レベルと直結したものと判断し、「社会【生活】」へ分類した。一方「農業・植物」には、農業技術や植物調査などの専門的で科学的な調査を分類した。

1. 第1巻1号 1945年1月刊行

(1)「ハサンオーラン村の歴史」

ターヒル・エルデム(ハサンオーランKE育成所副所長) 歴史 6 頁

ハサンオーラン村の歴史の調査研究。名前の由来の他、16 世紀の古文書から、当時の村の世帯、人口、収入を読み取り、変化を分析している。また、これまでに書かれた歴史的旅行記(17 世紀、19 世紀)に描写されたハサンオーラン村の様子や、同村に存在する紀元後 1 世紀、2 世紀ごろに使用された距離の目印の石、彫刻された石材や岩、村近郊で発見された古代硬貨を歴史的遺産として紹介しながら村の過去を探っている。

(2)「ハサンオーラン農村教員育成所の歴史」

ルザー・ドンメズ(YKE所属) 歴史 9 頁

ハサンオーラン農村教員育成所について、村の地理的環境、育成所及びYKEの設立過程や活動状況をまとめたレポート。設立に貢献した教員や勤務していた教員らの名前が列挙されている。

(3)「ハサンオーラン農村教員育成所の植物について」

ドゥルムシュ・アリー・ウウル(YKE所属) 農業・植物 5 頁

ハサンオーランKE周辺の植物区系の研究調査報告。植物採集した情報を活用しやすいようにまとめること、変化する中央アナトリアの元来の植物区系を記録に残すこと等を目的としていた。採集された植物の名前と採集日が列挙されている(2 頁強)。

(4)「ハサンオーラン村の生活状況」

テヴフィク・ユルドゥルム(YKE所属) 社会【生活】 6 頁

250 世帯、1,300 人が生活するハサンオーラン村の生活状況を、村全体の傾向と具体的に例示された代表的な 3 家族の収入源、収入額、支出額の表を使いながら解説したレポート。

(5)「ハサンオーラン、ウレーイル、アラブラル村の雑草」

テヴフィク・ユルドゥルム(YKE所属) 農業・植物 5 頁

身近に繁殖する雑草の情報を収集し、毒性のある雑草、飼料用の草、野菜として食べられる草など植物的特長をまとめる研究調査の導入部分。雑草の名前(毒性の有無)、見つかった村、生息地域が列挙されている(3 頁強)。後に続きを報告するとあるが、2 号に掲載された(11)「トラガカント」は彼の研究。ハサンオーラン近郊の地図を収録。

(6)「ナルドケン村のネヴルーズ祭」

ヒュセイン・セズギン(YKE所属) 社会【非日常】 9 頁

ナルドケン村の農民が 3 月、お墓を中心に行うネヴルーズ祭の様子について書かれたレポート。準備期間、前日、当日の農民の動きの詳細を描写している。祭の食物にも言及。「祭が消滅した理由は次回で」とあるが、後の号で続編はない。

(7)「バイラムル村での婚姻」

サーミー・アクンジュ(YKE所属) 社会【非日常】 9 頁

住人の多くはギリシャやブルガリアからの移民⁴³からなり、人口 1349 人(男 648 人、女 701 人)が居住するエディルネ県⁴⁴ウズンキョプリュ郡バイラム村が研究の舞台。同村における婚姻状況を、重婚、婿養子、嫁入り、未亡人の嫁入り、同居と別居、他農村との関係の 6 つに分け、それぞれが起こりうる状況や条件を詳細に調査している。

(8)「村の青年組」

イスマイル・トクナズ(YKE所属) 社会【生活】 5 頁

トクナズの出身村にある、13/14 歳以上の未婚男性から構成される青年組(Delikanlılar Birliği)の調査。設立、組内の約束事、青年組の役割、活動内容そして青年組での活動が持ち得る教育的影響を分析している。

(9)「チュクロヴァにおける土地と生産者の実状」

⁴³ 1923 年以降に行われた住民交換によってトルコ国内に流入してきた人々。

⁴⁴ ブルガリア及びギリシャと国境で接する県。

シェヴケト・フザル(YKE所属) 社会【生活】 4 頁

1943 年に行ったアダナ農業会議協会の調査をまとめたもの。地理的環境、開発状況、農作業の様子を描写する他、聞き取り調査からわかる生産者の問題に重点をおいている。その問題が発生する原因と土地所有の関連を分析している。アダナ県における土地所有状況を表した 3 つの表を収録。

(10)「バクル溪谷の 5 つの村の農業活動」

ヒュセイン・アトマジヤ／M・アリー・ウラル(YKE所属) 社会【生活】 8 頁

アリベイリ村、アヤス村、アジジエ村、ギョチュベイリ村、ザーノス村の 5 村の相互関係、家庭内の男、女、子どもの役割、経済状況、農村の土地所有状況を調査したもの。題では農業活動となっているが、前述の内容について包括的に 5 村を比較している。5 村の位置関係を示す地図、5 村の農業以外の仕事及び土地所有状況を表した小さな表を収録。

(11)「大草原と柳文化」

ヒュセイン・セズギン(YKE所属) 社会【文化】 5 頁

中央アナトリアに生息する柳と農民との関わりをまとめたレポート。建築素材、産業材料、農機具の材料、民間療法の薬や装飾として利用される他、信仰対象や民謡など精神文化として根付く柳の分析から、間接的に当時の生活の様子が伺える。民謡の一部を収録。

(12)「碑文発見の際の対処方法」

Prof. Dr.ゲオルグ・ローデ(アンカラ大教授) その他 2 頁

各地を巡るKEの生徒が、未発見の歴史的碑文を見つけ出した場合における情報の報告方法の説明。

2. 第 1 巻 2 号 1945 年 4 月刊行

(1)「嫁入り道具の社会的意味」

ビュルハン・ギュヴェニル(YKE所属) 社会【非日常】 14 頁

200 世帯、人口 300 人が居住するアンカラ県のチェルティクチ村の人間関係を、嫁入り道具という視点から分析しようとした研究。嫁入り道具に与える外的要因、嫁入り道具が人々に与える影響や役割を、花婿、花嫁の家族や近隣住人、友人の行動の中から読み取っている。

(2)「エドレミットの村々について」

スレイマン・カラギョズ(YKE所属) 社会【生活】 5 頁

エドレミット郡の村々の代表的なゼイティン村(695 世帯)の生活状況と文化状況を調査している。また、文化状況が発展しているギュレ村(200 世帯)と比較しながら文化の大切さを主張している。

(3)「害虫ケラ」

メスット・ヤルドウム (YKE所属) 農業・植物 3 頁

田畑に害を与える昆虫「ケラ」の生態を研究し、撃退方法も掲載している。

(4)「フォチャ農場のフォチャ村への社会的影響」

ルザー・ドンメズ (YKE所属) 社会【生活】 6 頁

フェトヒエ郡フォチャ村の住人のから 48 名の共同出資者で購入されたフォチャ農場が調査の対象。同農場の権利証書が 7 名だけに発行されたため不平等が生まれ、農村内で不和が発生。この不和の構造を社会的に分析している。フォチャ農場の共同所有者および分担金の一覧表を収録。

(5)「植物採集と乾燥方法」

アリー・ユルマズ (YKE所属) 農業・植物 5 頁

植物の採集、乾燥、保管方法を説明したレポート。採集に使用する道具及び乾燥に使う器具の挿絵を収録。

(6)「民話はどうのように収集されるべきか」

助教授 Pertev N. Boratav(アンカラ大学) その他 3 頁

各地から収集された、民話をYKEで纏め上げ保管所を設立するため、民話を誰から、どのようにして集めるのか、注意やアドバイスをまとめたレポート。

(7)「初乳歯を祝う儀式」

H・ギュレル(パザルオレンKE所属) 社会【非日常】 2 頁

ギュレルの出身村で習慣となっている子ども(特に第1子)の乳歯を祝う儀式を描写。儀式で重要な役割をもつブルグル料理を中心に調査を行い、女性だけが集いプレゼントを贈りながら、音楽とともにダンスをする様子が詳しく述べられている。民謡1曲を収録。

(8)「高原への遊牧」

アリー・カラ(パザルオレンKE所属) 社会【生活】 1 頁

高原(Yayla)への移動の一部始終をまとめたレポート。民謡1曲を収録。

(9)「薔薇摘み」

ファトマ・ディジュレ(YKE所属) 社会【生活】 3 頁

ウスパルタ⁴⁵県アタベイ村のバラ収集を解説したレポート。収集する若い娘らの会話を方言そのままに掲載している。

(10)「ゲンジエル(青年祭)」

M・シュクリュ・コチ(YKE所属) 社会【非日常】 2 頁

テュルクメンに起源を持つであろう、ゲンジエル(青年祭)をまとめたレポート。ゲンジエルの歴史、当日の服装や行動、催し物を詳細に描写している。村人が一同に会し、相互関係を継続するきっかけとしてのゲンジエルを評価している。

(11)「トラガカント(植物)」

テヴフィク・ユルドゥルム(YKE所属) 農業・植物 3 頁

中央アナトリアに生息する植物「トラガカント」を研究したレポート。農村の収入源になりうる植物であること、飼料として活用できることなどの特徴を紹介。トラガカントの成分表を収録。

(12)「イチェルにおける結婚式」

アリー・タシュチュ(アクスKE所属) 生活【非日常】2 頁

結婚適齢期の青年の家族側の視点から調査。花嫁を見つけることから結婚式までの過程を説明しながら、家族や近所との関わり、人々の役割を分析している。民謡1曲を収録。

(13)「村の民間療法」

アフメト・ネジャティ・オズデミル／イZZェト・オズイシ(クズルチュッルKE所属) 保健 2 頁

村で行われる民間療法と薬について、15の症状ごとに列挙している。(マラリア、わき腹の痛み、切り

⁴⁵ バラの生産で有名な県

傷、腫物、喉の痛み、目、高齢者のめまい、頭のしらみ、下痢、腹痛、疥癬、火傷、蛇や蠍に刺された場合、排尿困難、湿疹)

3. 第1巻3号 1945年7月刊行

(1)「繁殖する雑草」

アリー・ユルマズ(YKE所属) 農業・植物 12頁

農作物に被害を与える繁殖力の強い雑草の実態調査。調査はハサンオーランの他、ナルルハン郡、ベイパザル郡、エスキシェヒル県、カマン郡、アンカラ県の村々の大麦または小麦畑を中止に行われた。収穫物に紛れ込んでいた雑草一覧表を収録(7.5頁)。

(2)「マジャール村のある家族—日常生活—」

ファフリー・オズチェリキ(YKE所属) 社会【生活】 5頁

アンタルヤ県アランヤ郡マジャール村に居住し、アフメット・カヤを祖先に持つある一家の日常を調査。住居、日常の仕事、近隣住民との関係に重点をおいている。日常の食事に言及。

(3)「職業教育辞典に関する調査」

YKE生徒 その他 24頁

初等教育教員が使用する職業教育辞典の製作の指示。辞書に掲載される単語の一覧表を収録(6.5頁)。一部の事例を掲載(教材、Wehrli Joh Jakob(1790-1855)⁴⁶、ドルトンプラン⁴⁷、スウェーデンの教育、漁師／11.5頁)。

(4)「クズルジャハмамへの植物学的研究旅行」

メフメト・バシヤラン(YKE所属) 農業・植物 6頁

アンカラ県クズルジャハмам近郊で行われた植物調査のレポート。生息地帯ごとに列挙された、植物名のラテン語とトルコ語の対比一覧表を収録。(約5頁)

⁴⁶ スウェーデンの教育学者。労作の教育観を持ち、特に低所得の子どもや孤児を対象にした学校を設立した。

⁴⁷ ドルトンプランまたは、ダルトンプランと呼ばれる教育方法。アメリカの教育家 Helen Parkhurst によって考案され、マサチューセッツ州ダルトンの高校で実施された。年齢よりも各個人の能力を重視した教育方法。

4. 第1巻4号 1945年10月刊行

(1)「家畜肥料」

スレイマン・アドゥヤマン(YKE所属) 農業・植物 24 頁

家畜肥料について、材料となる家畜糞の種類、糞の発酵経過など様々な角度から分析。先行研究に言及しながら、熟成した肥料をどのように経済的に手に入れるのか、またその使用方法についてまとめている。

(2)「職業教育辞書から」

その他 9 頁

職業教育辞書から、いくつかの事例を掲載。(モンテッソーリ教育法、スペインの教育、フィンランドの教育、Fellenberg, Philipp Emanuel(1771-1844)⁴⁸、コンコルダート⁴⁹、初等教育教員金庫⁵⁰、子ども園⁵¹)

(3)「アブラムシ」

H・オルハン(YKE所属) 農業・植物 3 頁

苗木や野菜に被害を及ぼすアブラムシの生態を調べ、繁殖予防策をまとめたレポート。

(4)「イビ村での貸借行為」

アリー・デュンダル(YKE所属) 社会【生活】 3 頁

サムスン県ラディキ郡にある81世帯が居住するイビ村で村人の間に行われる貸借行為が研究調査の対象。貸借行為を、品物や貸借されている期間、返却方法の観点から3つに分類し(願入れ型、預け型、貸付型)、貸借行為に見られる村の社会構造と貸与行為により生まれる人間関係を分析している。

(5)「サライ村の行商人」

トゥラン・イト(YKE所属) 社会【生活】 4 頁

⁴⁸ スイスの教育家ペスタロッチの親友の一人。職業の観点から見ると、国力は農業と労働に秘められていると信じていた。彼が設立した貧困家庭の子どもを育てる学校は、数カ国で設けられた児童保護施設の手本となった。

⁴⁹ 通常は教皇庁と国家間の合意を意味するが、ここでは、転じて論議ののち双方が承認した条件で合意がなされる意味を持つ単語として紹介。

⁵⁰ 初等教育に従事する教員や視学官の、家賃、修繕費、住居購入費を確保する目的の金庫で、教育省に帰属し、本店はアンカラにある。

⁵¹ 日本では幼稚園と訳されるが雑誌のオリジナルの表現を重視した。ドイツ人教育家フリードリヒ・フレーベルによって始められた就学前教育の施設。

アンカラ県ベイパザル郡にある 350 世帯、人口 1720 人が居住するサライ村で受け継がれてきた行商の仕事が調査の対象。村人が行商の仕事を選択する背景、行商人の家とそうでない家の対比、行商人の仕事内容を調べ、行商人が持つ村や家庭への影響を分析している。

(6)「音楽作品」

シェヴィキ・アイドゥン(YKE所属) 芸術 6 頁

6 曲の楽譜と歌詞を収録(内 3 曲は民謡)。

(7)「チャウシュ村の花嫁の宴と花婿突付き」

エルマス・ヤザル(YEK所属) 社会【非日常】 7 頁

チャウシュ村の結婚式を、花嫁と花婿それぞれの側の家族の準備の様子から分析。結納品や、結納を行う際の習慣、食事を細かく描写。花嫁側の宴の様子と花婿側は花婿を突付き、殴りながらその忍耐力を試す花婿突付きの風習を紹介している。民謡 4 曲を収録。

(8)「仇討ち」

i・オズテュルク(YKE所属) 社会【非日常】 4 頁

東部地方において今日も発生し続け、死因の一つとなっている仇討ち(Kan gütme)の終焉を実現できるのかを考察する調査。東部に位置するカルス県ソスゲルト村で発生した仇討ち事件を代表事例として、このしきたりの本質を探っている。仇討ちの発生要因(社会心理的理由、心理的理由、経済的理由)、仇討ちに対する意識の高さ、仇討ちの特筆すべき特徴、仇討ちの終結(社会心理学的理由、経済的理由、社会学的理由)をまとめている。

5. 第 1 巻 1-4 号「農村研究調査部門」の総括

これまで、1945 年に刊行された第1巻1号から4号の農村研究調査部門に掲載されたレポートの概要を見てきた。ここで、先行研究で軽視されてきた、同部門の傾向を総括しながら教員候補生らが農村で何を見ていたのかを探っていきたい。

上記で分類された通り、同部門で扱われるテーマは主に「社会」、「農業・植物」、「歴史」、「芸術」、「保健」、「その他」の 6 分野に分別することができる。各号とテーマごとの頁数をまとめたものが表 3 である。

6 分野に分類したと言っても、実際「歴史」、「芸術」、「保健」の 3 分野はそれぞれ一度だけ掲載されたテーマであり、頁数も少なく主要なテーマとはいえない。但し、各調査では農村の歴史に言及したものは

多く、1-4号全体で10曲の民謡が収録されている。また「その他」は、17%と比較的多くのページを占めているが、掲載された文章は、編集部からの依頼や教授らからの指導、「職業教育辞書」製作過程の報告で、農村の研究調査とは無関係の内容である。

表3 『農村教員育成所誌』第1巻1-4号 農村研究調査部門分類表

分野	1号	2号	3号	4号	合計	割合
社会	39	35	5	18	97	43.3%
生活(日常)	23	15	5	7	50	51.5%
非日常	11	20	-	11	42	43.3%
文化	5	-	-	-	5	5.2%
農業・植物	10	11	18	27	66	29.5%
歴史	15	-	-	-	15	6.7%
芸術	-	-	-	6	6	2.7%
保健	-	2	-	-	2	0.9%
その他	2	3	24	9	38	17.0%
合計頁数	66	51	47	60	224	100.0%
作品数	12	13	4	8	37	

農村調査研究に掲載されたレポートは、「農業・植物」と「社会」の2分野と言っても過言ではないであろう。「農業・植物」分野は、KEで重要な位置にある分野であるにも関わらず 29.5%と決して多くはない。この分野は専門的で科学的な調査であると前述したが、主題は農業に害を及ぼす植物や害虫、あるいは農業を活性化させる肥料や植物の利用方法などがテーマとなっている。一方「社会」の頁数は全体の43.3%を占め、農村調査研究における主要なテーマを形成していることを表3から理解することができる。

内容が「社会」と分別された調査研究を、それぞれの内容から「生活(日常)」と「非日常」及び「文化」に細かく分類した。「社会」の中で計50頁、51.5%を占める「生活(日常)」の内容は、各村の生活状況であるが、多くの調査に共通して見られるのは、生活の糧となる収入やその稼ぎ方、そして収入の中心である農業を行う土地の所有状況の調査である。「社会」の中で「生活(日常)」に分類される11作品のうち6作品、頁数にすると66%(33頁/50頁)が村民の収入源となるテーマで研究されたものである。また男女あるは成人と子どもの役割に言及する調査も多く見られる。それ以外は日常生活の中で行われる習慣への言及で村内の組織(1号)、遊牧(2号)、貸与行為(4号)など多岐にわたる。一方の「非日常」では祝い事が中心であるが、特に結婚、婚姻に関わることが一番多く、「非日常」8作品のうち4作品、頁数で76.1%(32頁/42頁)が同内容に割かれている。残りの4作品は全く別のテーマで、「ネヴルーズ祭」(1号)、「乳歯を祝う儀式」(2号)、「ゲンジェル(青年祭)」(2号)、「仇討ち」(4号)となっている。

こうしてみると、農村研究調査の内容は農民の生活レベルや環境、婚姻や結婚の調査が主流とな

り、偏りがあると言える。翻って、KEの教員候補生らは、これらのことに関心を寄せていたと解釈できる。

更に、彼らの文章は非常に明瞭で、わかりやすい。また調査対象を詳細まで表現しているため、当時の農村の生活の様子がくっきりと目の前に現れてくるかの如く理解できる。例示すれば調査の主流テーマである「結婚」では、結納として交わされる物品、結納の品を届ける人物、嫁入り道具の中身、結婚式当日の農民らの行動が事細かに描写されている。これら詳細な調査が可能であったのは、彼ら自身が農村出身者であったからであろう。各調査は、農村教員候補生らの鋭い観察力に依拠しているのである。彼らがKEで身につけた教養の高さを伺い知るだけでなく、かつて自らも農村の当事者であったことから抜け出し、農村を冷静に客観視する態度を獲得していたと理解することができる。

第3章 「農村研究調査」の分析―農村の姿―

この章では、『農村教員育成所誌』第1巻1-4号に掲載された「農村研究調査」から読み取れる、当時の農村の姿についてまとめていく。なお、作品に付けられた括弧付きの番号は、2章1-4で使用したものと同一である。ここで、共和国成立時から1950年までの農村や農民を対象とした政策にざっと目を通してみたい。

1923年から34年までの間に、政府は住民交換で流入してきた人々や貧農へ71万ヘクタール(773万ドニウム)の土地を供与していた。34年から38年までにも更に30万ヘクタール弱(325万ドニウム)が分配された。しかし、分配された土地は難民1世帯あたり平均で4ヘクタール(43.5ドニウム)、貧農では1世帯当たり3.1ヘクタール(33.7ドニウム)、定住させられた遊牧民では1.7ヘクタール(18.5ドニウム)であったという。更にそれらの土地の95%が荒蕪地であった。1925年、十分の一税が廃止、地租と国家専売が導入されたことにより、小農の負担が減らされる一方で、その負担が地主と専売品の購入者である都市市民が肩代わりされることになる。1930年代になると、農業銀行主導の価格調整が行われ、1923年から32年までに農業生産は58%も伸びた。だが結局こうした改革で利益をえたのは富農層に限られたと推測される。

1934年から始まる第1次5ヵ年計画の中には、原料生産地に近接した産業を育成するため、工業中核都市を地方に分散させる計画があり、これを機に農民へ農業以外の雇用機会を与える試みがあった。第2次大戦下での地下経済の隆盛は、食料生産者の大農場主は莫大な富をもたらした。1943年になるとこうした資本主義的農業経営によって大きな利益を上げた大農場主からも財源を得るべく、農産物税が新設される。しかし、十分の一税の復活ともいえるこの税は、富農から余剰利益を吸い上げるより、小生産者からの搾取という結果となった。1945年、500ドニウム以上の私有地を国家が収用し、小農に分配する「土地分配法」が可決されるも、実施は47年まで延期、50年には収用される土地が5000ドニウム以上と改変

されて実質的な骨抜きが行われるのである。1947 年には、農業と農業に基づく工業の発展が重視されるようになるのである⁵²。

1. 経済活動状況と生活

(1) 農業と土地

KEカリキュラムに農業科目が組み込まれていたように、KE出身の農村教員らは農村の活性化において農業によって農村経済を安定させることを期待されていた。『農村教員育成所誌』に投稿する農村教員候補生らの関心も当然その分野に及んだのであろう。

ユルドゥルムは「ハサンオーラン村の生活状況」1 号(4)で土地の所有状況と収入源および収入額に関する調査を行ったが、その中でハサンオーラン村の様子を次のように報告している。「(前略)・・・農村全体が耕作する土地の広さは 12,000 ドニウム⁵³で、平均すると一世帯あたり 48 ドニウムとなる。どの世帯も多少とも畑を所有している。一番広大な土地所有者で 200 ドニウム、一番狭い土地所有者でも 20-30 ドニウムを有する。過剰に土地を所有するものは 10 人を超えない。

農村経済は、穀類、果樹園業、養蜂業、羊やヤギおよび土木業から成り立つ。農民は、収穫した作物を農村内で或いはアンカラで販売する。この農村の生活形態は次のようである;250 世帯のうち 120 世帯の生活は農業に直結している。80 世帯は、農業だけで生活を支え切れず、農業以外に土木業にも従事している。250 世帯の生活は完全に土木業に頼っているのである⁵⁴。4 世帯は農業と商店を営み、一部建設業も行い、3 世帯は農業と建設業で生計を立てる。・・・(中略)・・・中流で、農業を収入源とする世帯の 90%は、羊やヤギの群れや蜜蜂を飼育している。一番多く蜜蜂を飼う農民は蜜蜂箱を 150 個所有する。農業と土木業に携わる世帯の 30-40%は羊やヤギを所有し、土木業のみに従事する世帯で羊やヤギ、蜜蜂を飼う割合は 15-20%程度である。」

この後多数の収入源を確保することの大切さなどを説いていく。ユルドゥルムは実情を報告するだけで留まらない。この村で辛い思いをしているのが、農業と土木業に従事する農民であると指摘している。農業だけで生計を立てるには、土地が足らず、農業以外に土木業からも稼ごうとしても、種まきの時期と土木作業の時期が重なり、板ばさみになっているというのである。ユルドゥルムはより具体的にこれらの状況を提示しようと、中流世帯で農業のみに従事する 7 人家族、農業だけでは生計が立てられず、一部を土木業に従事することで補っている 5 人家族、土木業のみに従事する 6 人家族の収入源、収入額、支出額

⁵² 新井政美 2001 年、208-240 頁。

⁵³ 1ドニウム=919 m²。

⁵⁴ 雑誌のオリジナルに 250 世帯と表記されているので、そのまま引用するが、文脈からすると、43 世帯が土木業のみに従事していたと推測される。

を表した。これらの表を比較すると、ある一定以上土地を所有し、農業を行った場合とそれ以外からの収入に頼る場合の収入の格差がはっきりと読み取ることができる。

同じく 1 号に掲載された「チュクロヴァにおける土地と生産者の実状」(9)で、フザルは肥沃な土地であるにも関わらず、生産者たちの悲観的な様子を鋭く感じ、その疑問を現地の農民らにぶつけながら聞き取りを行い、その中から具体的な不満を書き表しているのである。「—この地方では土地の問題がありません。我々の土地は、全く無いのと同じくらい僅かで、充分ではありません。耕す土地が無く、誰かを頼るしか方法はあります。誰もが理解しています、今日の稼ぎで今日をしのげません。日給であっちの仕事こっちの仕事をしながらいい方向に向かうことができますか？数人の貪欲なものたちは、この広大な平原の大部分をそして肥沃な土地をちょうどいい時に獲得し、好き放題に利用している。我々も、彼らの農場で日雇い働きをし、常に彼らを必要とする状況に陥っているのです。・・・(中略)・・・別の農民は一年分の収入と支出を次のように列挙した；・・・(中略)・・・私は一軒家、果樹園4ドニウム、畑 35 ドニウムと車一台を所有しています。今年は、畑 35 ドニウムのうち 20 ドニウムに綿を、10 ドニウムには小麦を植えました。借金を支払うと、手元には 28 ギュレキ (gülek)⁵⁵が残りしました。小麦を 4 ヶ月買う必要がありませんでしたが今は買い始めました。一方 450kg の綿を収穫しました。この収入は 300 リラです。果樹園からの収入は僅かです。」

これらの不満を受けて、チュクロヴァの土地を更に詳しく調査していく。そしてこの土地を土地所有の形態を、「土地を所有しない者及び僅かながら所有する者」、「中流の生産者」、「大規模経営の所有者」に分類し彼らの農業と生活の様子を事細かに描写している。

「a)土地を全く所有しない、或いは僅かに所有する者たちは、生活において様々な問題を感じている。

彼らは、土地所有者と一緒に農業を行うか、畑を借りるか、或いは賃金労働を行い一番多いが—偉い生産者に身を寄せながら、彼らの奉公人の立場に陥りながら生活していました。

b) 中流の生産者は、それ程問題を抱えていない。同時に、チュクロヴァで、この規模の生産者は資金不足から大部分が大地主 (ağa) の支配下に入ることも真実である。彼らから高利の借金を支払えずに、畑の収穫、更に僅かな土地を大地主へ抵当として譲渡し、結果として経済的に大地主の支配下に入るのである。

c) 大土地所有者はというと：彼らは所有する土地を、自ら耕作する、または貸付ける、或いは小作人を雇うのである。貸付けや小作人用の土地は社会、経済的な観点からすると適切な運用とはいえない。不得策である。他方、この大規模経営の所有者の多くは、所有する土地を新技術を用いながら操業していないのである。また、多くの農民が土地を持たないことに不満を感じる一方で、大雑把な運営の結

⁵⁵ 1 ギュレッキ = 32kg. 28 ギュレキ = 896kg

果として土地の一部は草地で何も手を付けられていないのである。」

この報告は、中産生産者であっても大土地所有の支配の下で自由を奪われていく農民が少なくないという現実を明らかにしている。肥沃な土地であるため、農民らも裕福な暮らしをすると判断されがちではあるが、フザルはその第一印象にとらわれることなく、チュクロヴァの土地が大規模な農場形式が多く、特定の人物の管理下にあると冷静な視点から観察している。

同様に土地の所有状況によって農民らを5つに分類し、生活状況を調査したのが、1号「バクル溪谷の5つの村の農業活動」(10)である。「土地を全く所有しない者」、「1-25 デカル(dekar)⁵⁶の土地を所有する者」、「26-50 デカルの土地を所有する者」、「51-100 デカルの土地を所有する者」、「100 デカル以上の土地を所有する者」で、この村々では40 デカルの土地を、1世帯が自ら耕作すれば、自給自足が可能であるという。アトマジャとウラルは他の生徒同様、表を用いながら更にわかりやすい分析を続ける。

村名	土地 無	土地 有	1-25	26-50	51-100	100以上	村外に居住
アジジエ	25	102	69	30	1	2	
アヤス	30	147	86	37	20	1	3
アリベイリ	18	132	57	33	19	5	18
ギョチベイリ	26	205	144	42	13	1	5
ザーノス	17	78	30	16	4	7	21

「上記の数字から読み取れるように、農村で土地を所有しない世帯の割合は約16%である。当然ながら5 デカルまでの土地所有者もこちらに加算される;なぜなら農業に従事する世帯にはこれだけの土地は十分でないため。但し、タバコ農業を展開する世帯は10-12 デカルの土地で十分である。94%が農業を行う土地において、この割合は多すぎる。この理由を探るためこれらの世帯がどこから来たのかを調べるのが適切であると判断した。この世帯の多くが新たに定住した者であった。・・・(中略)・・・25 デカルまでの土地を所有する者は54%であり、彼らはやっと自給自足が可能である。彼らの多くは、他と共同で、或いは賃貸で土地を見つけなければならない。ここでは、彼らを零細農業と認識する。彼らは、一對の牽引用の馬、水牛や乳牛を数頭飼っている。新型のすきや車両といった農業機具も所有している。26-50 デカルの土地所有者は20%である。彼らは小規模農業と認識する。彼らは外部の土地に頼る必要はなく、自給自足が可能である。他者との差異は、自分達の土地を自分達で耕作していることである。農業機具にも優位性はない。51-100 デカルの土地を所有しているのは8%で、彼らの中規模農業と認識する。彼らの暮らしぶりは農村の中で良い部類に入る。一部は2組の馬を使用しなければならない程広く、農業機具も他の者と比較すると多い。100 デカル以上の土地を所有する者たちを大規模農業と認識するが、彼ら

⁵⁶ 1 デカル=1000 m²

は2%で、農村の富裕層である。彼らのうち所有する土地で一番広いのは220デカル土地である。この形態の農業の特徴は過剰に農業機具を使用することである。綿花の種まき機、耕作機、刈取機、草刈機のようにより実りをもたらす機具を使用する。この周辺には大規模農業は存在せず、農業形態を細かく分類するためにこの表現を用いた。以上の数字から判るのは、農村で大部分を占めるのは中規模農業である。そして多くの人は零細農業にも数えられないのである。」

このように、農村調査研究の文章はデータを引用することで、農民の生活状況を的確に報告している。そしてこれらの報告からは、土地が無い、あるいは僅かしか所有せず、苦悩する小農の多さを読み取ることができるのである。その一方で広大な土地を持つ大地主の暮らしぶりの良さ、たくさんの農機具を使用しても、広すぎて持てあました土地まで存在していることを指摘し、小作人や賃貸形式の土地の利用は不得策と断言している。例えば、アトマジヤやウラルは農民が一番価値を持ち、神聖なものと認識している存在が土地であると述べているように、土地が生活を左右する大切な存在であることがわかる。

カラギョズはエルデミットの村々からゼイティンリ村を代表例とし、分析した農業と生活状況を2号「エドレミットの村々について」(2)で報告しているが、まず彼は695世帯の生活状況を次のように区分した。

	(世帯数)
農業で生計を立てる中流家族	210
商売を営む家族	10
裕福な家族	5
小作人として暮らす家族	25
多数の羊を飼育する家族	6
土地を僅かしか所有しない家族	300
土地を所有せず労働者として生活する家族	100
手工業に従事する家族	37

この区分で明白に示されているように農村の半分以上の家族が土地を僅かに所有するか全く所有していないことがわかる。やはりこの調査でも「土地」問題が絡んでくるのである。カラギョズは、これらの状況を更に細かく書いている。

「裕福な農民は、500－600ドニユムのオリーブ園を所有している。20－30ドニユムのオリーブ園があれば中流の暮らしぶりが可能である。農村全体でオリーブの木は116,400本ある。移民として後から移住してきた農民は僅かの土地を所有するか、或いは全く所有していないかである。彼らは労働者として生計を立てている。この村の主要な収入源となるのはオリーブである。野菜や果実を栽培してもオリーブ程に

はならない。葡萄やイチジクが過剰に生産されるが、大きな市場で販売するにも、運搬するのが困難なため、収穫物は安値で数人の商人に売り渡される。…(中略)…上記の一覧表で示したように 695 世帯のうち 400 世帯のオリーブ園は少なく、生活は苦しい。…(中略)…村々において大半の農民の土地は充分ではなく、労働者として働くことで生活を成り立たせている。」

全世帯の内 30%しか農業での中流生活を実現できていない。57.8%の世帯は不十分な土地しか所有しない、または土地を所有しないため、農業の傍らで労働者としての収入を含めて、日々を過ごしていたのである。たった 20-30 ドニウムで並の生活ができる環境にあつて、25-30 倍ものオリーブを所有する農家が存在する。その格差は驚くほどに大きい。

KEの生徒は、農村を調査しながら実情を報告する一方で、実情だけではなく、農民達が抱える問題を感じ取り、時には不満の声をそのまま掲載し、時には更なる調査をした上で、彼らの嘆きを代弁するかの如く、淡々とレポートを投稿していると言える。彼らの報告は具体的な数値に裏付けられたもので、より信憑性をもっていると評価することができる。これはこの調査をする農村教員候補生ら自身が農村の出身であるからこそ、実現できたことであろう。

(2) その他

村々では農業に従事するものが多いが、これまで見てきたように土地の問題を抱える村民は、農業以外の職業を持っている。

「ハサンオーラン村の生活状況」1号(4)では、土木業や商店を営むことで、生活に必要な収入を確保していたが、実際は土木業と農業を両立するのは非常に困難であると指摘していた。農業以外の仕事に関して、「バクル溪谷の5つの村の農業活動」1号(10)は、5村実態について触れている。

「手工業に従事する人数は少ない。農業以外に従事する者達の中で一番多いのは商店経営やコーヒー店である。…(中略)…職人業は価値があると認識されているものの、農業は高収入であり、コーヒー店のような小規模な商売は手軽なため、職人になる熱意が湧かない。」

ここで言う農業以外の職業とは鉄工・車両業(6)、大工業(7)、靴屋(7)、理髪店(7)、コーヒー店(13)、商店(10)である。農作業に機械が導入されたことで、上記のような修理人への需要は高まってきていた。しかし農民自ら修理することも可能であった。複雑なトラクターは 1949 年でもトルコ全土で 1700 台しかなく、本格的に流入してくるのは 1950 年以降であった⁵⁷。農民らの日常生活で屋根の瓦敷き、車両の修理や、保存食を作るなどなど現在であれば専門の職に依頼するようなことのほとんどを家族内で解決してしまっていた。農村の生活は各自で解決できるほど質素であるため、特に職人技を必要としていない。当

⁵⁷ 新井政美 2001、242 頁。

時の村では、農業以外の仕事を見つけることは非常に困難を極めたであろうし、また従事したところで、稼ぎ出せる金額には限度があったようである。

イトは効率の良い職業である行商人としての仕事に焦点を当て、「サライ村の行商人」4号(5)という調査報告を掲載している。サライ村の土地は農業に適さず、更に土地が狭いこと、羊飼いや土木業に比べると代々受け継がれてきた行商の収入がよい為、350世帯のうち300世帯(85.7%)が行商に従事する結果となっているという。サライ村の土地所有状況は、一番の土地所有者が20デカル、一番少ない者が3デカルで、土地を所有しない者が20%いる。

サライ村の場合、昔から行商という仕事を継承してきているため、確実な収入源を確保していて然程問題を抱えているという印象はない。しかし、土地の所有状況に注目するならば、前節で見てきたデータと比較すると農村内だけではなく、農村間でも大きな開きがあることがわかる。

2. 農村社会

『農村教員育成所誌』の農村研究調査においては、個々人の調査よりも世帯ごとあるいは農村ごとの調査が多い。個人よりも大人数で作業を進める農業が中心となっているからであろう。ここでは、彼らの調査から解釈できる家族内あるいは農村内における男性(父親)、女性(母親)及び子ども達の立場、農村内の人間関係、農村同士の関係について探っていきたい。当時の農村家庭ではどのような人間関係が成り立っていたのであろうか。

(1) 男女、子どもの役割

1-1 男性(父親)の立場

「高原への遊牧」2号(8)に描写された遊牧のキャラバンを見ると、先頭をラクダに乗る村の長老と名士、そしてその他の村民が構成している。それに女性や子ども、青年や娘らが続くことになる。彼らの移動は家族単位ではなく、男性、女性と子ども、青年と娘といった順に別れて移動しているのである。これらの様子から小さな農村においても、男性社会、女性と子ども社会といった家族とは別の集団意識がしっかりと存在しているようである。

「バクル溪谷の5つの村の農業活動」1号(10)は家族内の役割に触れ、一応男女間において作業はそれ程分業されず、パンを焼く男性も、畑を耕す女性も見かけるといふ。とはいっても、やはり男性の仕事と見なされる作業というものは存在し、それらを列挙している。厩掃除、耕作、家族の家庭外での用事、家長としての振る舞うこと、タバコを植樹するための溝を掘ること、薪集め、市場へ出向くこと、粉引きの作業である。家長である以外は家庭以外の仕事をするのが男性の役割であるといえる。

一方で、大黒柱の男性が一人稼ぎに出るサライ村は、異なる様相を呈する。「サライ村の行商人」4号(5)で、行商をする男性が村に居る時と居ない時という2面性が村には存在すると指摘している。

「村では1年に2つの光景が見られる。一つは男性が村に居ない時期で、この時に村をまとめ、仕事進めるのは女性と子どもである。よそ者からは、この村と他の村との差異が一目で明らかである。他方男性が村に戻る6ヶ月間は、上記とは全く異なった雰囲気を醸し出す。農民はお金を手にし、洋服を買い替え、新鮮な食料品を購入する。男達は、一通りの支出から余剰として残ったお金を消費しようとする。コーヒー店は人で溢れかえる。男達は6ヶ月間、村に居ることを満喫するのである。」

1-2 女性(母親)の立場

男性の立場で参照した「バクル溪谷の5つの村の農業活動」1号(10)には、女性の仕事と認識される作業も列挙されている。それらは、食事の支度、洗濯、裁縫、アイロンがけ、パン焼き、家掃除、作物に混じった雑草を取り除くこと、夫の農作業の手伝いをするなどで農作業以外は家の中での仕事と言える。この分担を受けて、アトマジヤとウラルは女性の仕事を次のように記し、その働きぶりを客観的に評価している。

「女性の仕事は男性よりも多い。畑作業は家事よりも少なくない。だから女性は夏季に家事をほったらかしがちになる。夕方まで夫と一緒に畑で働いた女性は、帰宅すると食事の準備をしなければならないのである。」

女性や母親の婚姻における役割は「イチェルにおける結婚式」2号(12)に読み取れる。適齢期の青年を持つ母親は、息子の行動から結婚を考えているのがどうかを感じ取り、父親の機嫌が良い時にそれを告げる。息子は気に入った女性がいる場合、まず母親に打ち明けるようである。そうでない場合は縁談を見つけるため、母親や姉は花嫁候補の家やその近所をかぎまわり、情報収集に努める。ある程度まで話しが進んだところで男性陣が登場し、嫁に来ないかと縁談をまとめる。一般に結婚式は個人的あるいは家族間の行事であると捕らえられるが、農村では異なる。結婚式の翌朝、農村女性は集合し、ここで花嫁の顔がお披露目されるのである。こうして、村の女性に受け入れられ、嫁入りが終了する。この過程を振り返る限り、花嫁は家族の女性に決められるといっても過言ではないだろう。

男性と女性の立場を見てきたが、男性は外の仕事或いは家庭と外を繋ぐ役割を担っている。一方の女性は、家事を行うだけでなく収入源となる農業を手伝っている。男性は家長としての役割を持てはいるが、実際家庭内のことは女性が主導権を握っている印象がある。物事においても、女性が下地を作り、準備が整ったところで男性が登場してくる。

1-3 子どもの立場

現在トルコにおいても児童労働の問題は取り上げられるが、当時のトルコ農村においても子どもは仕事に参加していた。「チュクロヴァにおける土地と生産者の実状」1号(9)でフザルが聞き取りを行った農民は、「私は7人家族です。5人の内3人はまだ幼い子どもで、仕事はできません。2人の子どもはやっと手伝いを始めました。」と語っている。一方「バクル溪谷の5つの村の農業活動」1号(10)は年齢による仕事の内容を明らかにしているが、この農村は、5歳までの子どもは世話が必要であると考えている。5歳以上になると徐々に細々とした手伝いを始める。5-7歳の子どもは、タバコの葉を整理する作業に加わる。8-10歳では、タバコの葉の整理、羊を連れて牧草を追う、脱穀などの手伝いをし、11-16歳では、男児は父親と共に、女兒は母親の元で大人のように働き始めるのである。17歳で独立し各自仕事を見つける。女性には結婚する。この調査で、子どもたちは、特に畑作業の時期、両親の手足も同然である、と書いている。家族総出で農業を営んでいることがわかる。

「薔薇摘み」2号(9)の中でも若い娘たちが集団でバラの花びらを摘む様子が描かれている。最高品質の絨毯は若い娘にしか織れないと言われるが、それと同じように若い娘や新しい花嫁が中心になる仕事がこの村にも存在しているようである。だがなぜ若い娘であるのかについては残念ながら解明されていない。

(2) 人間関係

「初乳歯を祝う儀式」2号(7)では、子どもに初めて生えた乳歯を祝うため、親戚や近隣住人に知らせ、子どもが快適で裕福に生活できることを願い儀式を行う。親戚、近隣住人の女性だけが参加し、親しさの度合いに応じてプレゼントや祝い金を贈る。タンバリンを片手に民謡を歌いホロン(horon)を踊り騒ぐことが描写されている。

それだけではなく、2号(12)「イチェルにおける結婚式」では縁談を進める作業においても、近隣住人と協力して行う様子が書かれていた。

「(前略)・・・近隣住人の女性数名が、縁談先の娘の心を聞き出すため娘の家へ送られる。前向きであることがわかると、今度は縁談取りまとめ役(düğüncü)のグループが娘を嫁にくれと言いに行く。大抵の場合は、初めての訪問で了解を得られない。このグループは習慣的に3回訪問し、結果娘を嫁にもらえるか破談になるのである。」

一人一人の出来事を村全体或いは自分の家族の祝い事のように捉え、喜びを分かち合う村の緊密な人間関係が形成されているのである。

人間の節目となる出来事だけではなく、日常生活においてもいかに彼らのドュンダルはイビ村の貸借

行為をその期間や返却方法に応じて分類し、「イビ村での貸借行為」4号(4)として研究調査をまとめている。農民は誰一人として貸借行為を厭わない点を指摘している。

「近所から、フォーク、スプーン、塩入れ、ソフラ(Sofra)⁵⁸、盆、コーヒーセット、大なべ、なべ、チュル(çul)⁵⁹、チュバル(çuval)⁶⁰のような品物は借りた後、使用1、2時間で返却される。(願入れ型、Dilekleşmek)同じように近所から、犁、家畜用備品、くびき、牛、馬、ロバ、アバ(aba)⁶¹、ヤムチュ(yamçı)⁶²、荷車、車のような品物は1~3日、1週間の使用の後にそのまま返却される。長期返却型(預け型 Emanetleşmek)、更に近所から、お金、小麦、小麦粉、ブルグル、油、塩、ガス、ピーマン、大麦、ライ麦、とうもろこし、パン、ヨーグルト、牛乳、卵、たばこ、お茶、コーヒー、砂糖、葡萄、ペクメズ(pekmez)⁶³、石鹼、ソーダ、わら、クローバー、薬草のような消費される品物は貰い消費した後、相当する対価を労働などで支払う、或いは新しい物を購入して返却する行為は貸付型(Ödünleşmek)である。」

驚いたことに道具だけでなく、食料品や毎日消費される油や塩、ガスまで貸し借りの対象になり、対価は後払いされる。一定期間以内に返却できなければ、2倍にして返却されることもあるという。識字率が低く、その日暮らしの日常を送っていたと聞くと、粗野で野蛮な社会生活を想像しがちであるが、農村での人間関係は厚い信頼関係の上に成り立ち、ある種の秩序だった暗黙の了解がしっかりと存在することをうかがわせるのである。

3. 文化

(1) 祝祭

農村での生活状況に関する研究調査をみると、その日暮らしで潤いのない毎日を送っていたような印象を持ってしまいがちである。しかし、調査の中には、農村で行われる娯楽の祝祭を細かに描写したのも見られる。

村の結婚式は様々な通過儀礼を行わなければならないが、その一つが嫁入り道具のお披露目である。村中から集まった女性に対して、1点1点嫁入り道具が掲げられるので、それぞれ頭を悩ませる。お披露目会よりも嫁入り道具を揃える過程の方が様々な意味合いを持っているようである。ギュヴェニルは「嫁入り道具の社会的意味」2号(1)の中で、結婚のために揃えられる嫁入り道具を通して形成される人間関係

⁵⁸ 食卓。トルコ農村部では、床に座って食事をする際、及びパン生地を捏ねる際にも使用されるもので、円形で巨大な盆のようなもの。

⁵⁹ 馬の毛などでおった粗い布。

⁶⁰ 植物製の粗い大きな袋。

⁶¹ 目の粗い粗末な厚手の毛織物、またはその生地で作ったマント。

⁶² フェルトの雨具。

⁶³ ブドウなどのジュースを甘く煮詰めたシロップ。

を分析している。

多くの花嫁が、人が羨むような嫁入り道具を揃えたいと思う。しかし、経済状況によっては限界があるが、その時は友人に頼ることができる。友人がたくさんいる花嫁は嫁入り道具を立派にすることができると言われているが、友人は細かいものを花嫁にあげ、助けてくれる。どうしても揃わず、親しくする近隣住民や友人に借りることも可能であるが、これは決してよい解決策ではないという。借りた後は、貸してくれた人に礼儀を尽くし続けなければならなくなるのである。ギュヴェニルは嫁入り道具を、それを揃える間中ずっと家族を悩ませるものではあるが、それ故に家族、友人、近隣住人を結びつける隠れた力を持っているのであるとまとめている。

結婚式のような私的な行事の一方で、農村全体や隣村まで巻き込んだお祭りの一つが「ゲンジェル（青年祭）」2 号(10)である。テュルクメンに起源を持つといわれているゲンジェルはバイラム⁶⁴ (Bayram) の2 日目以降に催され、たくさんの若者が集う。ブランコやゴーカート、笛吹き屋などの遊戯コーナーと贈り物を販売するコーナーが設置され、子ども達はバイラムで貰ったお金を使いながら楽しむ。若者は夕方に集まり、手当たり次第にお酒を飲むため村の通りは酔っ払いで溢れるという。

調査を行ったコチュは、年2 回のバイラムで開催されるこのゲンジェルを口実に確実に遠くに居住する農民同士が顔を合わせると、祭が娯楽以外に人間関係を持続するために作用していることをご指摘している。コチュはこのゲンジェルを歴史的観点からも調べており、それによれば、オグズ族(Oğuz)⁶⁵ がアナトリアに流入してくる際、伝統や習慣を持ち込んだが、山間部に住んでいたテュルクマーン(Türkmen)⁶⁶ に外的影響はなく、彼らの文化であるゲンジェルが今でも存続しているのである。

興味深い祭の存在も明らかにされている。「ナルドケン村のネヴルーズ祭」1 号(6)は、早朝から夕方までの時間は、墓地でコーヒーを飲み、お互いの墓を訪問し合うという、墓地の祭である。食事をし、楽器を奏でながらさらに宴会は進む。夕食前に自宅へ戻ると今度は近所同士で集まり、夜遅くまで場合によっては朝まで酒を飲み、楽しむのである。ゲンジェルと同じように、この村の祭りにおいても、飲酒の様子が書かれている。若者は記憶がなくなる程にまで飲むという描写も、イスラム信仰が深い農村のイメージを覆す事実と言える。そして、墓地で宴会を行う最大の意味について、次のように述べている。

「(前略)・・・午後になると、墓主の妻は、亡くなった人の魂のため、分け前を分配する。この分配は次

⁶⁴ イスラム教の宗教祭日のことで、砂糖祭(Şeker Bayramı)と犠牲祭(Kurban Bayramı)がある。

⁶⁵ 北アジア、中央アジアの古トルコ系遊牧民族の名称。テュルクマーンと同義に使用される。イスラム化したトルコ族の始祖と考えられる。

⁶⁶ トルコ系の民族。一般的にはオグズ族のうち、ムスリムとなってイスラム世界に進出し、部族集団の形を保持していたものをテュルクマーンと呼ぶ。

のようである。大きな皿に、ボレッキ(börek)⁶⁷、レブレビ(lebrebi)⁶⁸、ユフカ(yufka)⁶⁹、砂糖が置かれ、お墓の横を通る人に配られる。時折「子ども達、集まれ！」と大声で呼ぶ。墓地にいる子ども達は集まり、分け前を貰うが、どのお墓から配られたかによって「亡くなった〇〇の魂に届きますように」と言う。・・・(中略)・・・墓地へ持参した食事を持ち帰えない。この理由を次のように説明する。我々は、その食事を彼ら(死者)の魂の為に持参し、我々が食べることは彼らが食べることと同じ意味を持つ。もし食事を持ち帰れば、彼らに恨みを抱かせる。」

魂の存在を信じ、分配された分け前によって魂に接近することを信ずる農民の行動からはシャマニズム信仰を連想させる。墓地での宴会に参加しなかった者は、夕方以降の村八分に遭うというほど、重要な意味を持つ祭のようだが、このような機会を通して、農民はお互いの祖先へ敬意を払いつつ同じ共同体としての一体感を維持しているのかもしれない。

年に数回行われるこれらの祭は、農民にとっての最大の娯楽であるだけでなく、農民同士を引き合わせ、お互いの安否を確認し、円滑で親しい人間関係と構築する上でも一役買っていたのである。

(2)信仰、迷信、伝統

トルコ人は古代において、月や太陽を祈りの対象としていた⁷⁰が、その名残ともいえるような、自然界への信仰の存在についても報告されているので見ていきたい。「大草原と柳文化」1号(11)のなかで、トルコの農村生活に不可欠な柳について分析しているが、柳への信仰が次のように描写されている。

「A:不妊女性は、村の樹齢が古い柳の影に馬の蹄鉄から落ちた鋏を打ち込み、樹皮に針を刺す。周囲にお金を投げて、立拝、伏拝、立てひざ拝の礼拝を2回すれば子どもができると信じている。柳の周りに投げられたお金を拾う者はいない。お金が拾われた女性は子どもができないと言われている。」

B:全く結婚に縁がない女性は、村のイマム(imam)⁷¹によって雄株の柳と結婚させられる。その後、その女性は結婚できると信じられている。この女性は「柳と結婚した」女性と呼ばれる。

C:いくつかの村に神聖とされる柳がある。マラリアにかかった者が布切れを結び付けることで完治すると信じられている。」

当時の農村でマラリアが多く発生していたのであろうか、「村の民間療法」2号(13)の一番初めの処方

⁶⁷ 小麦粉の薄皮の間にオリーブ油・ひき肉、チーズなどを入れ、たたんで焼くパイの一種。

⁶⁸ 炒ったエジプト豆。

⁶⁹ 小麦粉の薄皮。

⁷⁰ 新井政美 1984 116 頁。

⁷¹ イスラム指導者

もマラリアである。それによると;

「農村のホジャ(hoca)⁷²は、病人の腕に紐を結び、呪文を唱え、息を吹きかけ、護符をつける。または、にんにくを潰し、酢と混ぜ合わせて病人に飲ませる。マラリアの症状が続くと、脾臓が肥大するとして、熱した鉄で皮膚を焦がす。斧を振るような動きを見せるが、これで脾臓が縮小すると言っている。効用を次のように説明する。「斧の動きをすることで、脾臓に集まった悪魔は解散し、再び訪れることはなく、マラリアが治る。」」

農民らは、マラリアを悪魔の仕業と解釈していたのである。もちろん、この処方でマラリアは完治しない。この調査では、他にも多くの民間療法や民間医薬品が掲載されている。

「(前略)・・・下痢を治すには、バラの葉を煎じ、冷ました後コップ 1 杯を服用する。腹痛には、アジュヤヴシャン(acıyavşan)という背丈が 10cm で白い花を咲かせる植物を使用する。煮立て、濾しておき、空腹時に服用する。非常に苦い。この他、タイムと貞操木の油をパンにつけて食す、または腹部にぬる。食中毒が原因の消化不良には膏葉をぬる。膏葉はタイムと玉ねぎを混ぜ合わせオリーブ油で炒め、熱いまま腹部に貼る。・・・(後略)」

これらの処方で症状が緩和されるのか、薬草としての効能は不明であるが、他には犬の糞やくもの巣を処置に使用する、母乳を目に垂らすと言った目を覆いたくなる対処方法が列挙されており、当時の農村の健康衛生がいかに悲惨であったのか、低い生活レベルを読み取ることができる。もちろんKEで育成されこういった環境の農村へ派遣される保健員らの重要な任務は理解されよう。

第4章 結語

以上、YKEが 1945 年に刊行した『農村教員育成所誌』第 1 巻 1-4 号に掲載された農村調査研究部門を分析、検討してきた。同誌には、トルコ各地ーアナトリアの大地ーに散在するトルコ農村の生活状況や習慣、また生産効率を上げるための多種多様な農業知識が掲載されている。

農村の調査、研究ということで、雑多なテーマが扱われていると推測されたが、こうして検討してみると、彼らの関心が土地の所有に集まってきていることがわかる。そこには、多くの小農の存在と、少数派ではあるが権力を持った富農と地主の構造がはっきりと描かれている。

更に、『農村教員育成所誌』の読者が、トルコ各地 20 箇所に散在したKEの生徒であったことを考慮すると、同誌が持つ意味は異なってくるであろう。これまで、自分の村やその周辺しか見たことがなかった農民出身の生徒らは、『農村教員育成所誌』を通してトルコ各地の農村の状況を知ることになる。程度の差

⁷² 通常は学校の先生であるが、イスラム指導者や年配者、尊敬に値する人物に対して使用されるため、原語を引用した。

はあれ、農民が抱える問題には「土地」という共通項が存在しているが、この共通項を意識し始めることは、農民らが一斉に連帯感を抱くによりきっかけであると言えよう。同誌の中心にいた西洋文学教員のエュブオールが『農村教員育成所誌』によって各KEが連携し合うようになると考えたが、確実にその要素を所持していたのである。

元来、KE出身の農村教員らは農村へ戻り農業技術を普及させながら教員として勤めることを義務とされていた。だが育成された生徒は、農業技術だけでは補うことのできない根本的な問題、つまり、耕す土地が無いということを認識し始めていたことがわかる。もちろん、政府はこの「土地問題」に気が付いており、『農村教員育成所誌』の1-4号が刊行された1945年の5月、500ドニウム以上の私用地を国家が収用し小農に分配するという「土地分配法」が、イノニユによって議会に提案され、同法案は満場一致で可決されている⁷³。これまで、政治や改革から遠い立場にいた農村は、急激にその距離を縮めたといえる。

しかし、この法案の実施は1947年まで延期され、1950年には収用される土地が5000ドニウム以上一土地所有者の0.01%一から収用すると改変され、実質的骨抜きが行われた⁷⁴。羽ばたこうとした農村はその翼を折られてしまったのである。

各研究で村の歴史的背景および地理について調べられ、明瞭な言語(トルコ語)で報告されること、本稿で詳細まで触れなかったが、碑文を発見した際の対処方法や各地の民謡を収集する要請と指示を掲載する行為は、アタテュルクがアナトリアの国土を研究し、トルコ民族が歴史の中で果たしてきた偉大な功績を「科学的」に研究したこと⁷⁵と類似性を持っている。つまり、国民を「トルコ人」であることを誇りに思えるように仕向けるというアタテュルクのナショナリズムと重なっているように捉えることができる点は興味深い。しかし、『農村教員育成所誌』に掲載される文章に、農民らのトルコ人としての意識について書かれたものではなく、トルコ共和国という単語は使用されずその意味をアナトリア(アナドル)と表現さえしている。更に農民の文化や経済形態が他の民族から受け継がれたものであることを正々堂々と書いており、ナショナリズムの強さは全く感じられないのである。

残念ながら、今回は全8号のうち1-4号までの「農村研究調査」しか分析することができなかった。残りの部分は今後の課題としたい。本稿では、KEの新たな側面を提示する目的のために『農村教員育成所誌』を使用した。付随的に当時の農村の様子を垣間見ることができた。分析を通して感じた、同誌に対する考えを述べたい。これまでほとんど脚光を浴びることがなかった『農村教員育成所誌』ではあるが、実際は文化人類学的な好奇心をそそる内容が掲載され、当時の農村世界に知ることのできる数少ない貴

⁷³ 新井政美 2001年、235—236頁。Zürcher, Erik J. 1995.p.219.

⁷⁴ 新井政美 2001年、235頁、Zürcher, Erik J. 1995.p.219.

⁷⁵ 新井政美 2001年、217頁。

重な資料であるといえる。当時の知識人には調べ尽くすことができない農村の実態を詳細に記録した点を高く評価したい。

文献目録

●日本語

新井政美 1984:「トルコ協会」の設立とその活動 『東洋学報』65-3・4

新井政美 2001:『トルコ近現代史』 みすず書房

江原翠 2002 年度卒業論文

永田雄三 1997:「トルコの近代化と文字」 『歴史教育』18 巻 7 号

『新イスラム辞典』 2002 平凡社

●トルコ語

Akyüz, Yahya. 1999: *Türk Eğitim Tarihi. (Başlangıçtan 1999'a)* İstanbul: ALFA.

Altunya, Niyazi. 2002: *Köy Enstitüsü Sisteminin Dışinsel Temelleri*. Ankara: Uygun Basım ve Ltd. Ş.

Apaydın, Halise. 1997: “Köy Enstitülerinde Sanat Eğitim” Ed.Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı. *Köy Enstitüleri Amaçlar-İlkeler-Uygulamalar*. Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı.

Arayıcı, Ali. 1999: *Kemalist Dönem Türkiye'sinde Eğitim Politikaları ve Köy Enstitüleri*. İstanbul: Ceylan Yay.

Başaran, Mehmet. 1999: *Özgürleşme Eylemi: Köy Enstitüleri*. İstanbul: Cumhuriyet Kitapları.

Başaran, Mehmet. 2001: *Sabahattin Eyuboğlu ve Köy Enstitüleri*. İstanbul: Papirus Yayınevi.

Başgöz, İlhan. 2005: *Türkiye'nin Eğitim Çıkmazı ve Atatürk*. İstanbul: Pan Yayıncılık.

Bayrak, Mehmet. 2000: *Köy Enstitüleri ve Köy Edebiyatı*. Ankara: Öz-ge Yayınları.

Cihangir, Mehmet. 1997: “Yüksek Köy Enstitüsü” Ed.Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı. *Köy Enstitüleri Amaçlar-İlkeler-Uygulamalar*. Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı.

Cimi, Mehmet. 1995: *Tonguç Baba-Ülkeyi kucaklayan Adam-* İstanbul: Boğaziçi Yayınları.

Gedikoğlu, Şevket. 1971: *Evreleri, Getirdikleri ve Yankaları ile Köy Enstitüleri*. Ankara: İş Matbaacılık ve Ticaret.

Kaplan, İsmail. 1999: *Türkiye'de Milli Eğitim İdeolojisi*. İstanbul: İletişim Yayınları.

Kirby, Fay. 2000: *Türkiye'de Köy Enstitüleri*. Ankara: Güldiken Yayınları.

Konyar, Hürriyet. 1996: “Köy Enstitülü Köy Öğretmenleri” *Tarih ve Toplum*. Sayı 148.

Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı. 1999: *Çeşitli yönleriyle Tonguç*. Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı.

Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı. 2000: *Köy Enstitüleri ile İlgil Yasalar Cilt 1.2*. Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı.

Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı. 2003: *Köy Enstitüleri I - II* Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim

- Vakfi. (*Köy Enstitüleri I*.1941:Ankara. Milli Eğitim Bakanlığı, *Köy Enstitüleri II*.1944:Ankara. Milli Eğitim Bakanlığı の復刻版)
- Makal, Mahmut. 1997: “Köy Enstitülerinde Kitap ve Okuma.” Ed.Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı. *Köy Enstitüleri Amaçlar-İlkeler-Uygulamalar*. Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı.
- Makal, Mahmut. 2000:*Bizim Köy*. Ankara: Güldiken Yayınları.
- Özkurcur, Abdullah. 1990: *Hasanoğlan Yüksek Köy Enstitüsü*. Ankara:Selvi Yayınları.
- Öztürk,Cemil. 1996: *Atatürk Devri Öğretmen Yetiştirme Politikası*. Ankara: Türk Tarih Kurum Basımevi.
- Tonguç, Engin. 1997: *Bir Eğitim Devrimcisi: İsmail Hakkı Tonguç. (yaşamı, öğretisi, eylemi)* Ankara: Güldiken yayınları.
- Tonguç, İsmail Hakkı. 1997: *Köyde Eğitim* Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı.
- Tonguç, İsmail Hakkı. 1998: *Eğitim yolu ile Canlandırılacak Köy*. 3. baksı. Ankara: Köy Enstitüleri ve Çağdaş Eğitim Vakfı.
- Türkoğlu, Pakize. 2000: *Tonguç ve Enstitüleri*. İstanbul: Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları.
- 1944-47: *Köy Enstitüleri Dergisi*. 1-8. Ankara:Milli Eğitim Bakanlığı Basımevi.
- 1943: *Köy Enstitüleri Öğretmen Programı*. Ankara:Maarif Matbaası.
- 1999: *75 Yılda Eğitim*. Ed. Fatma Gök, İstanbul. Tarih Vakfı Yayınları.
- 1999: *75 Yılda Köylerden Şehirlere*. Ed.Oya Baydar, İstanbul. Tarih Vakfı Yayınları.

● 英語

- Zürcher, Erik Jan. 1995: *Turkey A Modern History*. New York:St. Martin's Press.
- Winter, Michael. 1984: “The Modernization of Education in Kemalist Turkey.” *Atatürk and the Modernization of Turkey*. Ed.Jacob M. Landau. Cololado:Westview Press. Leiden: E.J.Brill.